新潟県埋蔵文化財調査報告書第5

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

茶　院　遺　跡

1976

新潟県教育委員会

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

茶　院　遺　跡

1976

新潟県教育委員会

序

本書は，北陸高速自動車道の建設に伴い，昭和48年度新潟県教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した，西蒲原郡中ノ口村茶院遺跡の発掘調査の記録である。

本調査により，奈良時代から平安時代に及ぶ遺物群を検出し，新潟平野における遺跡様相の一端が明らかになった。近年，平野部における低湿地帯の調査が進められているが，本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸である。

終りに本調査に参加された調査員各位はもとより，多大の御協力御援助くだされた地元中ノ口村及び同教育委員会関係者，また計画から調査実施に至るまで格別の御配慮を賜わった日本道路公団・県高速道路課・燕用地事務所の方々に対し，ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和51年3月

新潟県教育委員会

教育長　厚　地　　武

例　　言

1．本報告書は，北陸高速自動車道の建設によって消滅する埋蔵文化財包蔵地を，日本道路公団から新潟県が委託を受け，県教育委員会が昭和48年度に実施した新潟県西蒲原郡中ノ口村茶院遺跡の発掘調査記録である。

2．出土遺物の整理，復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当の職員があたった。

3．出土遺物の写真撮影は本間信昭があたり，実測・図版の作成は本間信昭，家田順一郎があたった。

4．本報告書は，本間信昭，家田順一郎が分担執筆したもので，文末に執筆者の氏名を明記した。

5．発掘調査にあたり，参加者各位ならびに中ノ口村のあたたかい御支援と御協力を賜わった。また，日本道路公団新潟工事事務所，県高速道路課，燕用地事務所から種々の御配慮を賜わったことを記して感謝の意を表したい。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1

1．発掘調査に至る経過

2．調　査　経　過

Ⅱ　遺　　跡……4

1．立地と周辺の遺跡

2．グリッドの設定

3．土　　層

Ⅲ　遺　　物……9

1．土　師　器

2．須　恵　器

3．中世・近世の陶器

4．その他の遺物

Ⅵ　総　　括……20

1．土器について

2．ま　と　め

図　版　目　次

図版第１図　　茶院遺跡附近の航空写真

図版第２図　　遺跡の近景（南側より），遺跡の近景（西側より）

図版第３図　　発掘グリッド，打越館推定地の土塁

図版第４図　　14Ｃグリッド北壁断面，22Ｃグリッド東壁断面

図版第５図　　６Ｓグリッド東壁断面，２Ｃグリッド西壁断面

図版第６図　　発掘風景，須恵器（蓋）出土状態

図版第７図　　須恵器（横瓶）出土状態，近世陶器（甕）出土状態

図版第８図　　土師器（甕形土器・堝形土器），吹子口

図版第９図　　須恵器（坏形土器・埦形土器・壺形土器）

図版第10図　　須恵器（蓋形土器・横瓶）

図版第11図　　須恵器（甕形土器・横瓶），中世陶器，砥石，近世陶器

挿　図　目　次

第１図　周辺の地形と遺跡……5

第２図　遺跡周辺の地形とグリッドの設定図……6

第３図　土 層 柱 状 図……7

第４図　腐植土層と遺物の分布……8

第５図　土師器（甕形土器・鍋形土器），須恵器（甕形土器）……10

第６図　土師器（甕形土器・壺形土器・高坏形土器・底部）……11

第７図　須恵器（坏形土器）……13

第８図　須恵器（埦形土器・蓋形土器）……15

第９図　須恵器（甕形土器・横瓶），中世陶器……17

第10図　須恵器（甕形土器・壺形土器・横瓶）……18

第11図　吹　　子　　口……19

第12図　砥　　石……19

Ⅰ 調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

近代道路の建設の一環として「国土開発自動車道」が計画され，その一路線として昭和46年，新潟県―富山県―石川県―福井県―滋賀県に至る北陸高速自動車道の法線が発表された。新潟県における北陸高速自動車道は，新潟―長岡―上越―糸魚川を経て富山県に至るもので，新潟―長岡間は新潟平野を通過する。新潟―長岡間における遺跡分布調査では7ヶ所の遺跡が道路法線にかかっていることが確認され，茶院遺跡もその一つである。

茶院遺跡は，新潟県西蒲原郡中ノ口村大字打越に所在する遺跡で，現況は水田となっている。昭和25年頃，真島衛氏によって西蒲原郡一帯の水田地帯の遺跡分布調査が行われた。(註1) その折中ノ口村打越地内で須恵器が採集され，茶院遺跡と呼ばれるようになった。以前，茶院遺跡周辺には畑地が多くあり，暴れ者の大男「モス」を退じて埋めたと伝えられる「モスの塚」と呼ばれた2基の塚や，東西に流れる川があった。しかし昭和30年代に行われた大規模な農業構造改善事業によって削平，埋め立てが行われ，現在の水田と化した。その事業のおり，塚からは多量の人骨が発見されたと言われ，畑地や水田の工事では，たくさんの須恵器，土師器などが発見されたとのことであるが，当時発見された遺物のすべてがすでに散逸しており実見することができず，その後，はざ木を建てる際に掘った穴から発見されたといわれる古銭100枚余りが西村十二氏宅に保管されている。

高速道路法線の発表に伴う遺跡分布調査は，昭和43年から実施され，中ノ口村については山本仁氏によって第一回の現地調査が行われた。その後，昭和46年，上原甲子郎，青木宏調査員と文化財保護室伊藤正一によって第2回の現地調査が実施され，茶院遺跡が道路法線にかかることが確認された。昭和47年，文化財保護室は文化行政課となり，高速道路の遺跡調査は埋蔵文化財担当職員があたることとなり，同年6月，関雅之，本間信昭，戸根与八郎が現地調査を実施し，遺跡の内容，範囲及び調査範囲の決定を行った。昭和48年5月，金子拓男，本間信昭，駒形敏朗が再度現地調査，聞き込み調査を行った。昭和48年11月1日，小野栄一，本間信昭が中ノ口村教育委員会の協力を得，土地所有者と発掘調査の実施に伴う話し合いを行い，11月5日，再度土地所有者との話し合いを持ち，了解点に達し，中ノ口村及び地元打越の方々の協力を得て，昭和48年11月12日～12月19日までの38日間にわたって発掘調査を実施した。

（本間信昭）

註1　真島衛『西蒲原郡内遺跡地名表第1報』（孔版）昭和29年

2. 調 査 経 過

北陸高速自動車道の法線決定に伴う遺跡分布調査の結果，茶院遺跡の一部が法線にかかることが確認され，新潟県教育委員会は日本道路公団東京建設局と協議を重ね，道路法線にかかる部分について発掘調査を実施し，記録化をはかることとなった。昭和48年10月，新潟県知事亘四郎と日本道路公団東京建設局長との間で発掘調査委託契約が締結された。発掘調査主体は新潟県教育委員会（代表 教育長 矢野達夫）がなり，発掘調査は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたった。発掘調査は用地取得前に実施することとなったため，用地上の問題が難行したが，土地所有者の協力を得ることができ，昭和48年11月12日～12月19日まで発掘調査を実施し，出土遺物の整理は昭和49年度に行った。

調査日誌抄

昭和48年11月12日～11月17日　12日，発掘調査器材の運搬を行い，現場プレハブ小屋に点検，整理し格納する。午後から発掘調査区域の確認と調査手順打合せを行い，中ノ口村教育委員会，打越区長に挨拶まわりをする。13日，調査予定地区東西60m，南北210mにグリッド基本杭を設定する。14，15日，調査区域に3×3mのグリッドを設定し，遺跡全景の写真撮影を行い，午後から周辺の遺跡調査をする。16日，調査員，作業員がプレハブ事務所に集合し，調査方法及び事務説明を行い，発掘作業を開始する。発掘作業は，58，62，66，70ラインのグリッドからとりかかり，第3層黒褐色土層中から須恵器が検出された。17日，62，66，70ライングリッドの発掘作業を継続する。

11月19日～11月24日　19日，46，54，58，62ラインのグリッドの発掘作業に着手したが吹雪となり作業を続行することができず中止する。20日，みぞれの中を前日の作業を継続する。62C，58Kグリッドの地表を下約50cmで小礫層と黒色の泥の層が検出された。地元の話を総合すると旧河川の位置にあたる。旧河川からはずれる各グリッドの第3層黒褐色土層中から土師器，須恵器，中世陶器等が検出され，遺物が出土する深度はほぼ一定している。54Kでは旧畑地と水田部の境にあたり，土層の相異がみられる。21～24日，30～40ラインのグリッドの発掘作業を行う。40ラインのグリッドでは泥炭層があり，泥炭層中からは須恵器と近世陶器が混在して検出された。

11月26日～12月1日　26日，1～14ラインのグリッドの発掘作業を行う。6Sグリッドでは第4層の泥炭層が東側に傾斜しており，第5層の灰色粘土層から須恵器が検出された。2Oグリッドでは第4層が泥炭層になっており，中世陶器が検出された。27日，14～30ラインのグリッドの発掘作業を行う。18C，30Cグリッドで須恵器，土師器の出土が多い。28日，14～100ラインのグリッドの発掘作業を行う。60ラインのグリッドで須恵器が多く検出された。30Cで

吹子口が検出された。29日，40ラインのグリッドの発掘作業を行う。40ラインでは須恵器，土師器が比較的多く検出された。30日，２～22ラインのグリッドの発掘作業を行う。１日，14～17D，Ｃグリッド第３層から須恵器，土師器が検出され，16Ｃグリッド第４層の灰色粘土層から須恵器蓋，壺等が検出され，11Ｃグリッドでは泥炭層の切れがみられる。

12月３日～８日　３月，12Dグリッド，64～68ラインのグリッドの発掘作業を行う。12Dグリッドでは横瓶が検出された。４日，64～69Ｃ，Ｄグリッドを集中的に発掘する。午後から吹雪になり作業を中止する。５～８日，積雪が約50*cm*となり発掘作業ができず，雪を除きながらグリッドの断面図作成を行う。

12月10日～15日　部分的な発掘作業と併行しながら，グリッド断面の実測作業及び写真撮影作業を行い，15日，現場での作業を終了した。

12月17日～19日　現場作業終了の最終打合せを行い，器材，出土遺物，記録，図面等の点検，整理を行い，19日，器材，遺物等の撤収を行い全作業を完了した。

長期にわたる本発掘調査に対して，調査員はもとより，交渉等種々の問題解決にあたられた小野塚喜一，長谷川長雄，浅野喜一，海藤権蔵の各氏をはじめ，中ノ口村当局，中ノ口村教育委員会，地権者の方々から多大なる御援助，御協力を賜わったことに対し，ここに深く感謝の意を表する次第である。

また文化行政課　本間嘉晴課長をはじめ職員一同のあたたかい支援を受けたことを明記しておきたい。なお，本発掘調査の調査団組織は次のとおりである。

（本間信昭）

調査担当者　本間信昭（県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員）
調　査　員　家田順一郎（県教育庁文化行政課嘱託）
作　業　員　打越・牧ヶ島・西村の有志
協　力　員　中ノ口村役場
中ノ口村教育委員会
佐々木民十郎・小野　操・宮腰辰雄・西村折作・佐藤健三郎・長沼　博
大野三男
事　務　局　柴野達男（県教育庁文化行政課管理係長）
小野栄一（県教育庁文化行政課主事）
苅部啓子（県教育庁文化行政課嘱託）

Ⅱ 遺　　跡

1. 立地と中ノ口村の遺跡

新潟平野は，信濃・阿賀野の二大河川をはじめ，県境の山地を源にする中小河川の堆積により形成され，河川の後背湿地と海側を砂丘でふさがれた内陸に多くの潟湖を残した。これらは近世中期以降に干拓が進められるまでは，ほとんど手のつけようのない腐水地帯であった。

中ノ口村は新潟市の南東約25㎞にあり，中ノ口川の左岸に位置する典型的な農村である。三角州性の〝信濃川・西川低地〟に属し，標高２～３ｍの平坦地であるが，マクロにみると南から北へやや傾斜している。茶院遺跡の西約８㎞に弥彦山地があり，東へ約12㎞で東山丘陵に達する。この間で遺跡付近はもっとも低く，標高は約2.1ｍである。周辺には多くの自然堤防・微高地が存在するが，水田面との比高は１ｍに達しない。(註1) このため大正年間に信濃川の分水が完成するまでは年毎に洪水に襲われており，上流の出水はもとより，下流での破堤に際しても，たびたび逆水に見舞われた記録が残されている。(註2)

中之口村周辺の低地では，土師器・須恵器より古い遺物は発見されていない。主に中ノ口村以南の自然堤防で多くの遺跡が発見されているが，その過半は奈良～平安時代に属すると推定されるものであり，残りのほとんどの遺跡は中世と考えられている。

このことは中ノ口村を単位とした場合も例外ではない。第１図に示した11地点の内訳は，１・３・５・８・９が土師器・須恵器の出土地であり，２・４・６・７・10の各地点では中世の陶質土器が発見されている。このうち４は２地点あるが，南側の地点は宇智古志神社境内にあった塚で，径３ｍ・高さ1.5ｍといわれ，骨蔵器を埋蔵していた。また北側の地点は打越館跡と推定されており，図版第１・３図にみるように，一辺が約80ｍの方形の遺構で土塁・堀跡が残存している。なお中ノ島村においては，他に大字姥島・針ヶ曾根・三ツ門等で土師器または須恵器が出土したと伝えられるが，今日，地点が不明になっている。

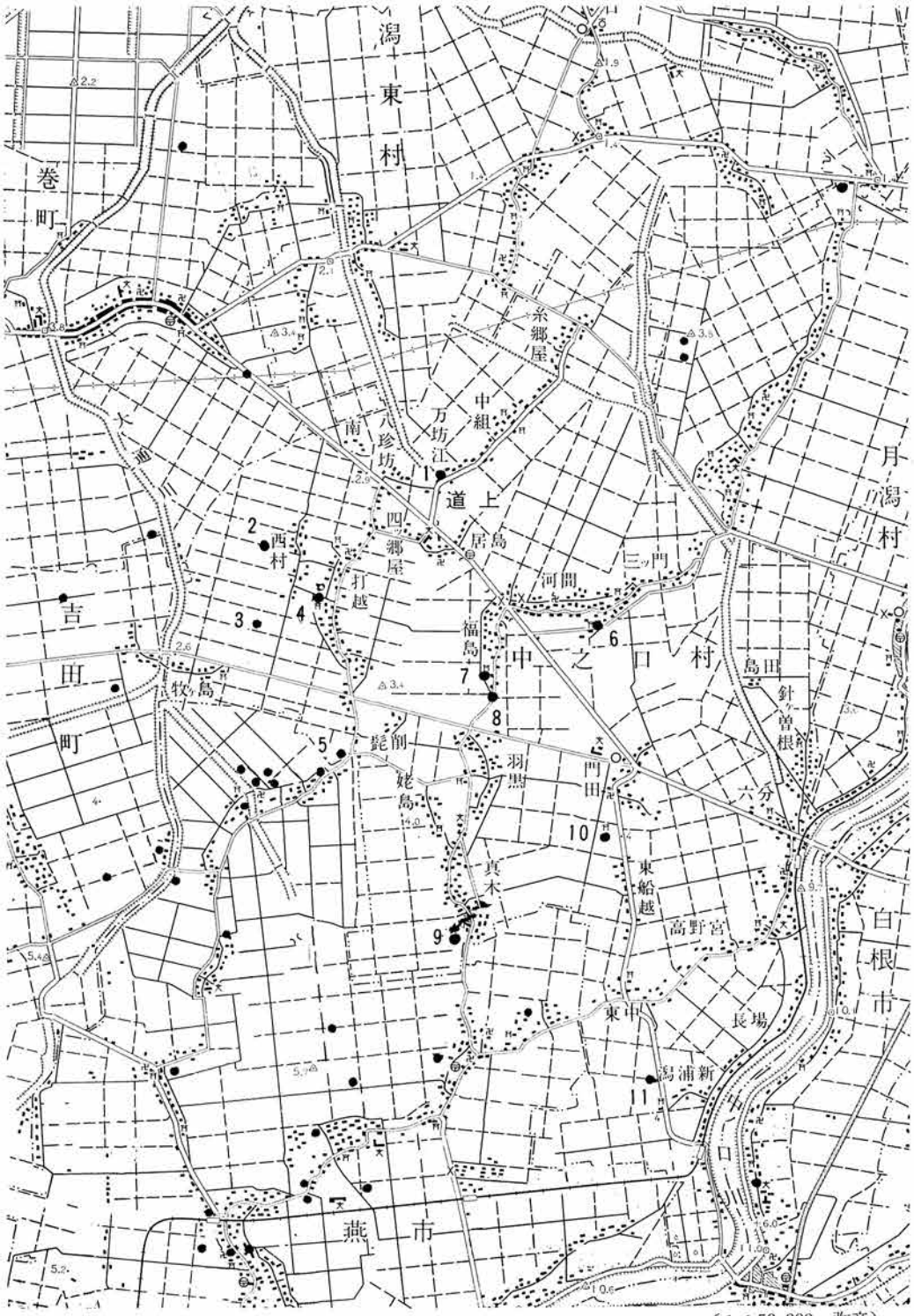
（家田順一郎）

註１　鈴木郁夫「地形区分図」「傾斜区分図」（『下越開発地域土地分類基本調査――内野・弥彦』新潟県 昭和48年）

註２　田中康子「江戸中期以降における小高・佐渡地区の災害について」（〝燕郷土史考〟第５集　燕市教育委員会　昭和48年）

「元治元年（1864）……三月二八日には中ノ口川が出水し大倉（味方村・引用者註）の堤防が百五十日間にわたって切れ，……そのために鎧潟から逆水し打越まで水が来る程であった。」（44）

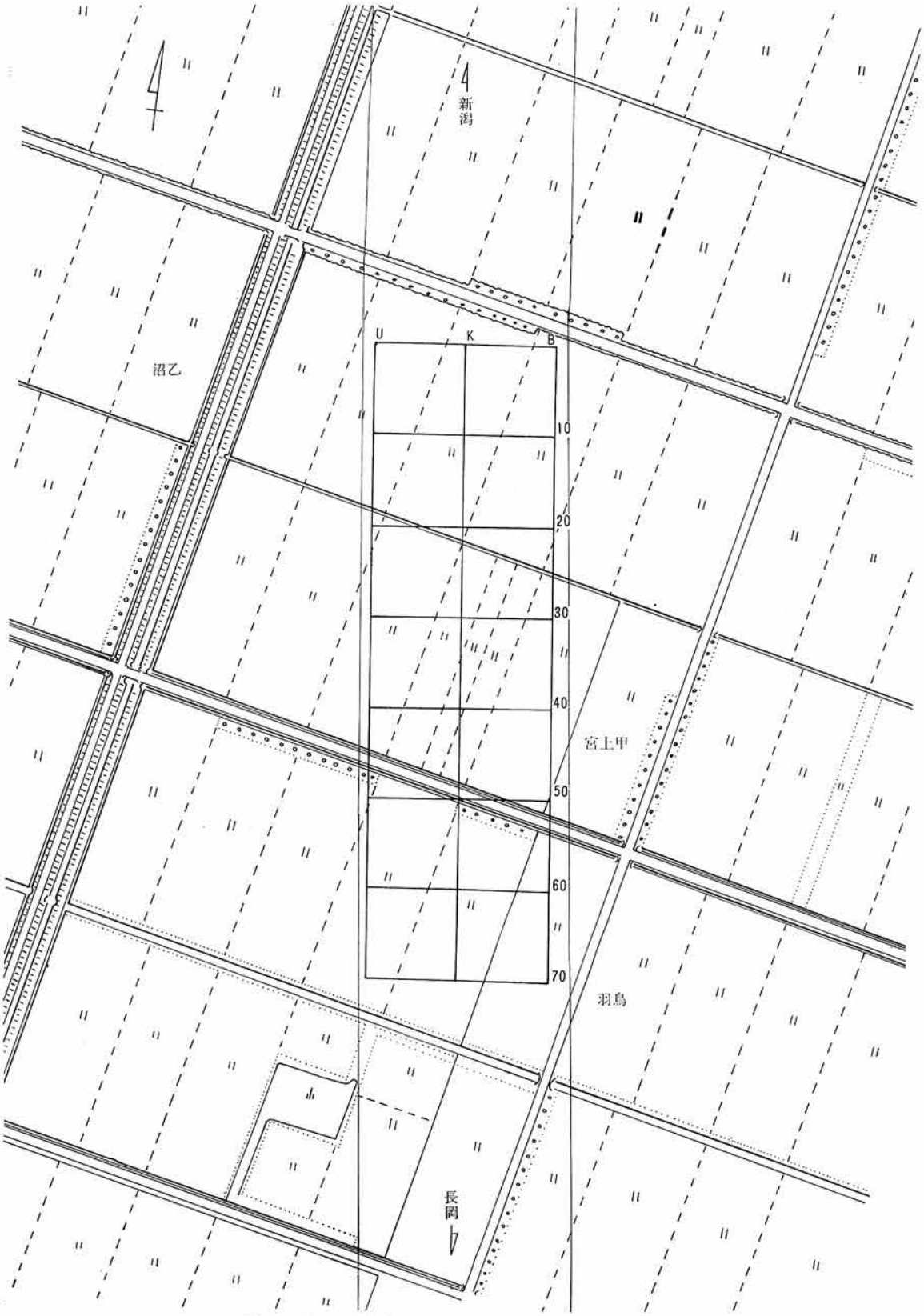
「明治八年（1875）七月九日出水し，……中ノ口川では味方，吉井に破堤があり，このため打越，長所まで逆水した。」（45）



（1：50,000　弥彦）
（国土地理院発行）

第 1 図　周辺の地形と遺跡

1．万坊江　2．西村　3．茶院　4．宇智古志神社塚・打越館　5．天神
6．河間八幡　7．福島　8．康塚　9．見対　10．東船越館　11．高野宮館



第 2 図　遺跡周辺の地形とグリッドの設定図

2. グリッドの設定（第2図）

発掘調査地点における道路法線は，ほぼN5°Wを軸とする直線で，東西に60 *m*の巾をもっている。すでに耕地整理した水田なので，表面からの観察によって遺跡の中心を決めることは困難であったが，旧畑地や塚の存在した位置，土器出土地点などに関する情報を参考にして，大字打越字宮上甲から字羽島に至る210 *m*の間に杭打ちを行なった。

グリッドは3×3 *m*を一区画として設定し，これに北から南へ1～70，東から西へA～Tの記号をつけ，1A～70Tのように組み合わせグリッドの名称とした。

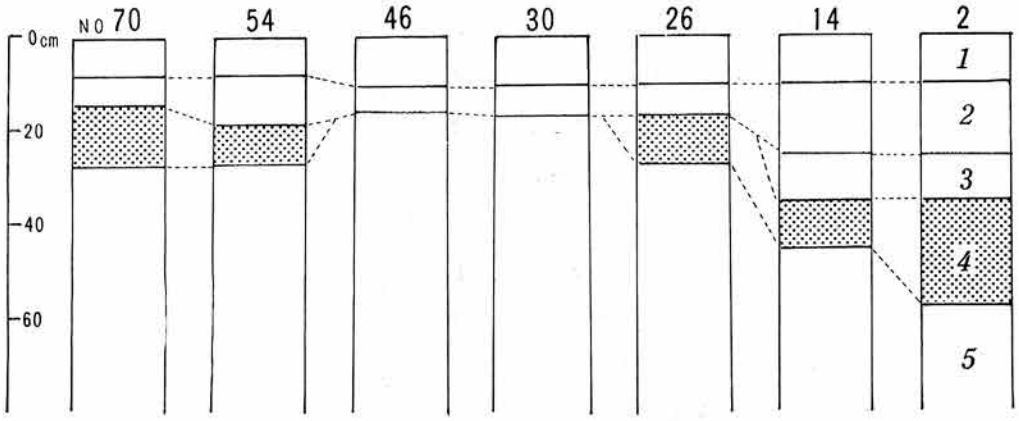
3. 土　　層

調査区域の土層を概観するため，Kラインにおける南北方向の断面図から抽出して第3図を作成した。以下，各層について若干の説明を行なう。

全域が水田なので，表層の20～30*cm*の間は共通の層である。すなわち1層が平均10*cm*の耕土，2層は8～20*cm*の厚さの粘土層で青灰色を呈している。この部分は耕地整理により，人為的に移動され，造成された土層とみなして差しつかえない。

3層は，ほぼ6C・14K・22Sを結ぶ線の北側にのみ認められる。色調からは2層と明らかに区別できるが，感触において相違は認められない。

4層は黒色または黒褐色の腐植土である。この層の様相は図版第4・5図にみられるように，所により，かなり異なっている。層の厚さは14C北壁など5 *cm*程度の所から約40*cm*の所まであり，調査地域の南半部では10～15*cm*の厚さの水平堆積を示すが，北半部では2C西壁に代表されるように南東から北西に傾斜している。また地質においては随所に22C東壁のように，灰褐



第3図　土層柱状図

1．耕土　2．青灰色粘土　3．暗灰色粘土　4．黒色腐植土　5．灰色粘土

色粘土が混入し斑状を呈する所が認められる。この層の地質は湿原植物の遺体が堆積した泥炭または泥炭質粘土と考えられるが，すでに黒泥化していて，肉眼で植物遺体を認めることはできなかった。

5層は灰色粘土層である。4層の下部において，所により青灰色を示すが，その一般的な傾向は把握できなかった。

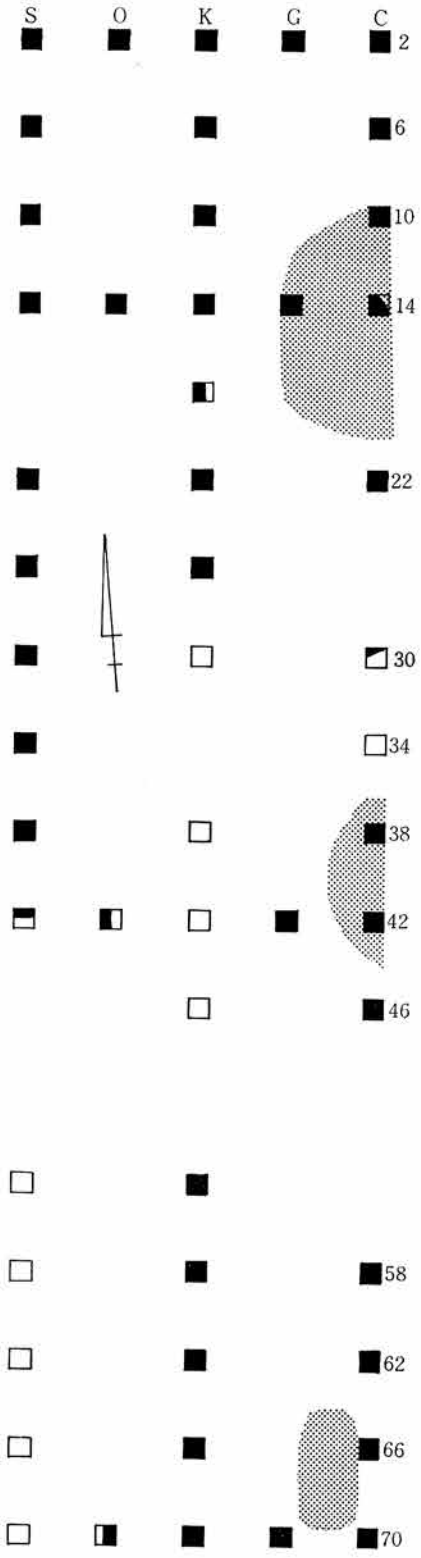
第4図は土層断面図を作成したグリッドについて4層・腐植土層の部分を黒で表わし，相対的に遺物量の多かった地域に網目をかぶせたものである。

白ヌキのマス目は4層の存在しないグリッドで，34Cから70Sまで北東—南西方向に調査地区を横断している。この地域は第3図の46K・30Kのように5層・灰色粘土層のレベルが相対的に高いところから，微高地の名残りと推定できよう。北西—南東方向の巾は一様でないが，おおむね30m程である。第1図と図版第1図を参照すると，この微高地の北東に西村があり，南西に牧ヶ島があって，これらを一連のものとみなすことができる。調査地域の北西には沼という小字がある。

遺物の出土は全体に散漫であったが，図示した3地点からの出土量が相対的に多い。全域においては1～5の各層から断片的に出土しているが，これらの地点では腐植土層の中に比較的安定した出土状態が認められた。腐植土層の状況は54Kや26Kと同様で，地表から30～40cmのところに10～20cmの厚さで水平に堆積している。

一方，微高地と推定される帯状の地域における遺物の出土は極めて散漫で，包含層と呼ぶべき土層は認められず，遺構と思われるような土層状況も発見できなかった。これは耕地整理によって削平され，湮滅したもの推定できよう。

（家田順一郎）



第4図　腐植土層と遺物の分布

Ⅲ 遺　　物

本遺跡から検出された遺物は，土師器，須恵器，中世陶器，近世陶磁器，吹子口，砥石等で，平箱にして約２箱の量である。土師器，須恵器が約90パーセント，10パーセントが中・近世陶磁器，その他の遺物である。

1．土　師　器（第５図１～23，第６図，図版第８図１～23）

甕形土器（第５図１～23，第６図１～４・６～８，図版第８図１～17・19～21・23）

甕形土器は細片になっているものが多く，全体器形のとらえられるものはない。胎土は水漉し粘土に砂を混入したもので，輪積または巻き上げ法をとっている。焼成は悪く軟質で，褐色または暗褐色を呈し，器面にススが付着しているものもある。

第１類（第５図１～４）　頸部が「く」の字状に曲り，口辺部が外傾し口唇部が突き出す。胴部は緩やかな丸味をもってふくらみ，器面が櫛整形されている。１は口径15.7*cm*，２は口径25*cm*，３は口径27*cm*，４は口径17*cm*で口唇部に１条の沈線がある。

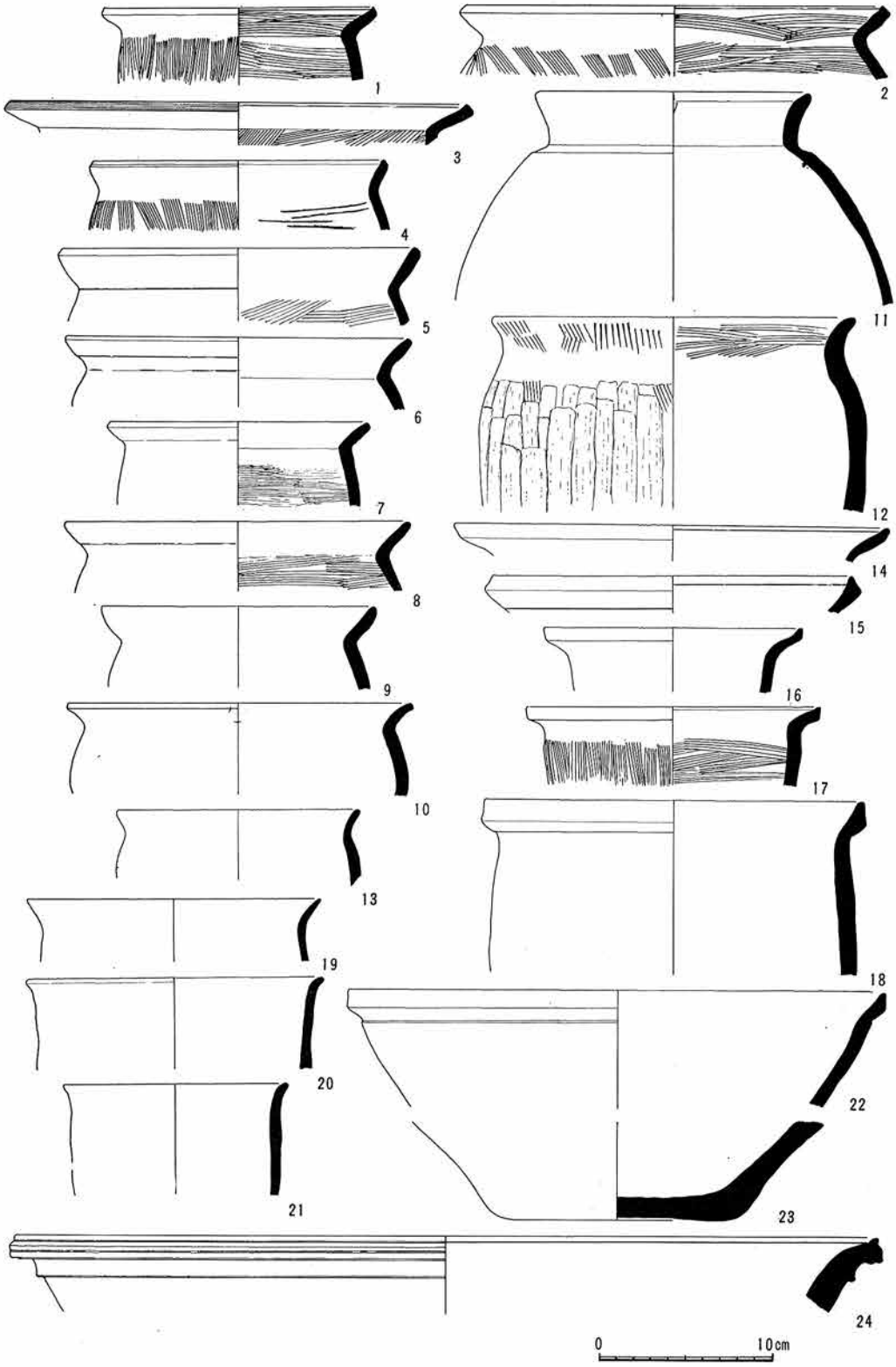
第２類（第５図５～７）　頸部が「く」の字状に曲り，口辺部が外傾し口唇部の断面が角形を呈する。胴部は丸味をもってふくらみ，器面が櫛整形されている。５は口径20.5*cm*，６は口径20*cm*，７は口径15*cm*で，６の口辺部中程に接合痕が残っている。

第３類（第５図８・９）　頸部が「く」の字状に曲り，口辺部が外傾し口唇部断面が丸形を呈する。胴部は若干張り，口辺部に横ナデ痕が残る。８は口径20*cm*で口辺部中程に接合痕が残り，９は口径15.8*cm*で口辺部が若干内彎状を呈する。

第４類（第５図10～13）　頸部が「く」の字状または緩やかな丸味をもって曲り，口辺部が外反する。10は口径19.5*cm*で口唇部が角形を呈し，胴部は緩やかな丸味をもって張る。11は口径18.7*cm*で肩部に陵を有し，胴部が張り，最大径が胴中位にある。12は口径20.5*cm*で頸部が緩やかな丸味をもって曲る。胴部は張りが少なく，櫛整形後縦位の篦整形を施し，器厚である。13は口径14*cm*で頸部の曲が緩やかで胴部の張りが少なく，胴部が器厚である。

第５類（第５図14～18）　口辺部が外傾し口唇部で直立して断面が嘴状を呈する。胴部は垂直に下り長胴形を呈する。14は口径24.5*cm*，15は口径20.5*cm*で口唇部が三角形を呈し，口辺部に１条の沈線を有する。16～18は胴部が垂直に下り長胴形を呈し，16は口径14.5*cm*，17は口径16.8*cm*で内外面が櫛整形されている。18は口径21.7*cm*で口辺部が折り返し状を呈する。

第６類（第５図19～21）　口辺部が外反し，胴部が垂直に下り長胴形を呈する。19は口径17



第 5 図　土師器（甕形土器・鍋形土器）・須恵器（甕形土器）

cmで口辺部が長い。20・21は口辺部が短かく，20は口径17.2cm，21は口径13cmである。

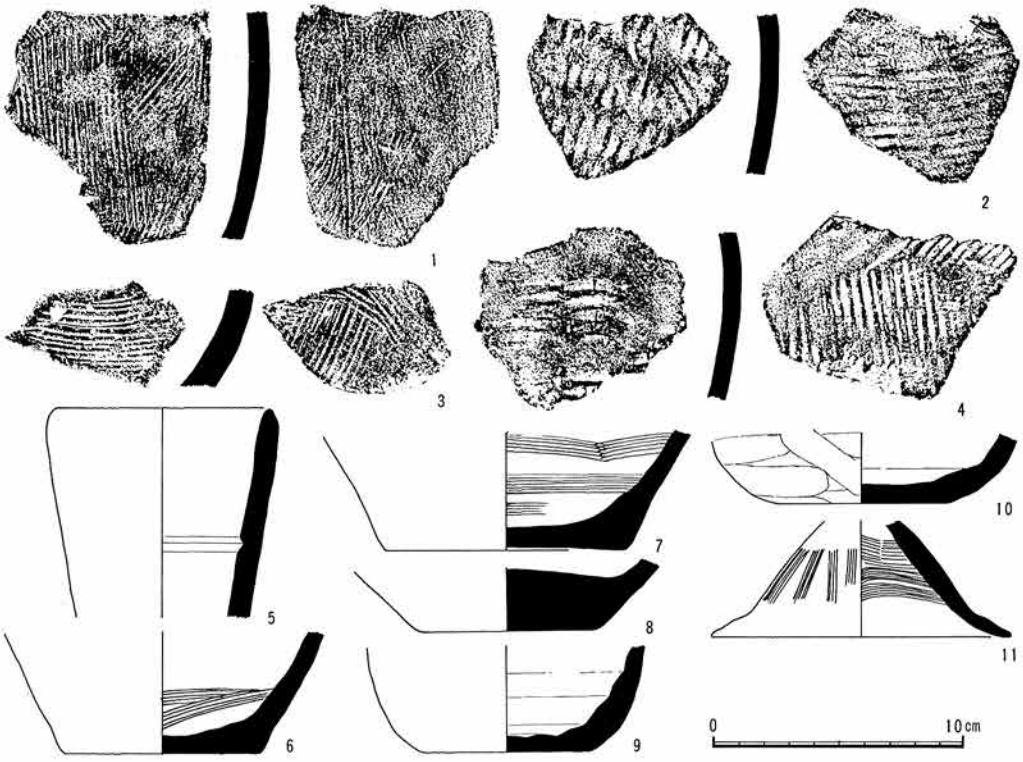
第6図1～4は胴部破片で，1・3は内外面櫛整形され，2・4は外面が太く短かい平行叩目文，内面が条のある平行叩目文となっている。

鍋形土器（第5図22，図版第8図18）　口辺部断面が三角形を呈し，頸部に一条の沈線を有する。胎土には細い砂が混入され，器厚で器面にススが付着している。口径は30.5cmである。

壺形土器（第6図5・9・10）　器形はわからないが，直立する長い口辺部で中程に接合部がある。胎土には細い砂を混入し，厚手で焼成が悪く軟質で褐色を呈する。口径は8.7cmである。

高坏形土器（第6図11）　脚径12cmで「ハ」の字形に開き，器内外面が櫛整形され，胎土には細い砂を混入している。焼成は悪く軟質で暗褐色を呈する。

底部（第5図23，第6図6～10，図版第8図19～23）　23は底径13cmで胴部の立ち上りが外傾する。6～8は平底で胴部の立ち上りが外傾して広がり，6は底径7.7cm，7は9.5cmで櫛整形され，8は底径7cmである。9・10は壺形土器の底部と考えられ胴部が丸味をもって立ち上り，胴部にロクロ痕が残る。9は底径6.5cm，10は底径6.7cmで外面が篦整形されている。



第 6 図　土師器（甕形土器・壺形土器・高坏形土器・底部）

2. 須　恵　器（第5図24，第7図～第9図1～26，第10図，図版第9図～図版第11図1～25）

坏形土器（第7図，図版第9図1～11）

平底を有する一群を坏形土器とした。小破片となっているものが多く，器形のとらえられるものは13個である。

第1類（第7図1～5）　篦起しされた底部から外傾して立ち上るロ辺部を有する一群で，胎土は水漉しした粘土をそのまま使用したと推定され，砂の混入がきわめて少ない。焼成が良好で硬質のものは暗灰色または灰黒色を呈し，焼成がやや悪く軟質のものは灰白色を呈する。1は口径14cm，底径10cm，高さ3.4cmで底部がわずかに丸味をおびる。2は口径12cm，底径7cm，高さ2.9cmで底部からの立ち上り部分が削り状を呈する。3は口径18cm，底径8.3cm，高さ3.1cmで底部がわずかに厚く，立ち上り部分が削り状を呈する。ロ辺部内面に段が残る。4は口径14cm，底径10.4cm，高さ3.3cmで底部が厚く，篦起し後ナデが行われている。立ち上り部は削り状を呈し，ロ辺部内面に段が残る。5は口径15cm，底径10.6cm，高さ3.5cmで底部は篦起し後ナデが行われている。器は全体に薄く，焼成が悪く軟質で灰白色を呈する。

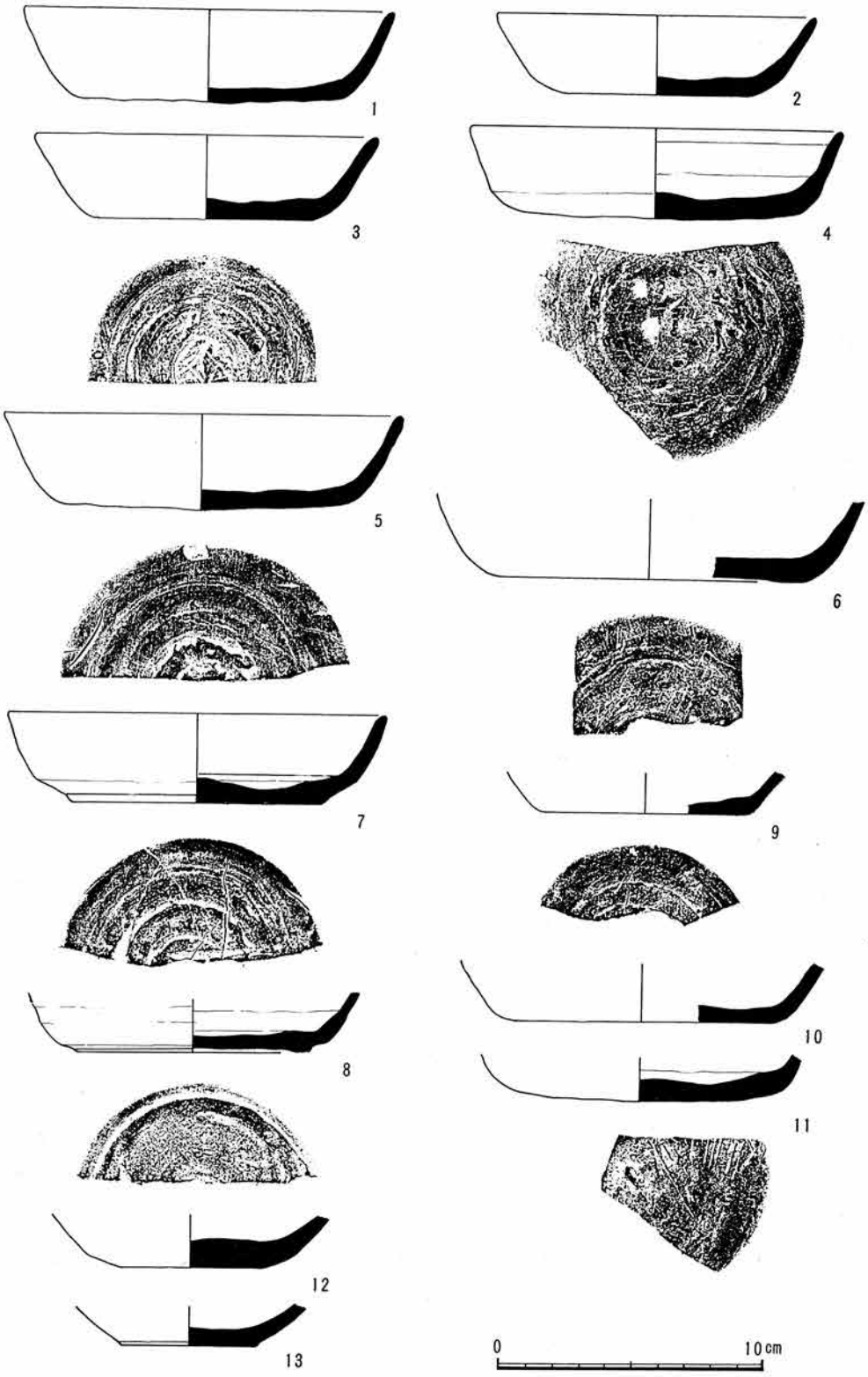
第2類（第7図7）　7は口径14cm，底径9.4cm，高さ3.3cmで底部は篦起し後ナデを行っている。立ち上り部は削り状を呈し，底部が高台状を呈する。ロ辺部は内彎ぎみに立ち上り，底部内面の凹凸が大きい。胎土は水漉し粘土をそのまま使用し，焼成が良く硬質で外面茶褐色を呈し，内面は暗灰色を呈する。

底部（第7図6・8～13）　6は底径11.5cmで底部が篦起しされ，立ち上り部がわずかな削り状を呈する。8は底径8.6cmで底部が篦起しの際の差し込みが深く高台状を呈する。9は底径7.5cmで底部は篦起し後ナデを行っている。10は底径10cmで焼成が悪く軟質で灰白色を呈する。11は底径9.5cmで底部が丸味をおび，胎土に砂を含み焼成は良く硬質で灰色を呈する。12は底径5.3cmで底部が厚く，立ち上り部が削り状を呈し大きく外傾する。13は底径5cmで底部からの立ち上りが大きく外傾する。

椀形土器（第8図1～11，図版第9図12～20）

高台を有する一群を椀形土器とした。椀形土器で全体器形のわかるものは1点もなく，高台の形によって分類を試みた。

第1類（第8図1）　1は口径11cm，底径6.3cm，高さ4.5cmで高台部分を欠除している。底部は篦起しされ，付高台となっている。立ち上り部が「く」の字状に屈曲し，ロ辺部が外傾して立ち上る。器は2枚の粘土板を張り合わせたようになっており，断面中間で内面と外面が分離している。内面は灰黒色を呈し，外面は暗灰黒褐色を呈する。胎土は水漉し粘土をそのまま使用し，焼成は良く硬質である。



第 7 図　須　恵　器　（坏形土器）

第２類（第８図２）　２は底径10.3cmで底部が篦起しされ，立ち上り部分が削り状を呈し，外傾して立ち上る。高台は垂直に接着され，細く先端部が内削ぎ状を呈する。胎土は水漉し粘土に細砂が混入され，焼成は良く硬質で灰黒色を呈する。

第３類（第８図３～６）　高台が垂直または外傾して接着され，先端部が外方に突き出す一群で高台が厚い。３は底径11cmで底部が篦起しされ，底部からの立ち上り部が緩やかな丸味をもって曲る。胎土は水漉し粘土をそのまま使用している。４は底径11cmで立ち上り部が緩やかな曲りをもっている。胎土は水漉し粘土に細砂を混入している。５は底径12cmで立ち上り部が屈曲し器厚で，胎土は水漉し粘土をそのまま使用している。いずれも焼成は良く硬質で灰色を呈する。６は底径11cmで立ち上りが緩やかに屈曲して立ち上る。胎土は水漉し粘土に大粒の砂が少量混る。焼成は良く硬質で，外面は灰黒色，内面は灰褐色を呈する。

第４類（第８図７～９）　高台が垂直に接着され，内彎状を呈し先端部が内側に突き出す一群で，７は底径７cmを計る。底部が厚く，高台は削り整形をしている。胎土は水漉し粘土をそのまま使用し，焼成は良く灰黒色を呈する。８は底径９cmで底部からの立ち上りが緩やかな丸味をもっている。高台は細くて低い。９は底径６cmで高台が内側に巻き込む。胎土は水漉し粘土をそのまま使用し，焼成が良く硬質である。器内外面は灰黒褐色を呈し，内部は茶褐色を呈する。

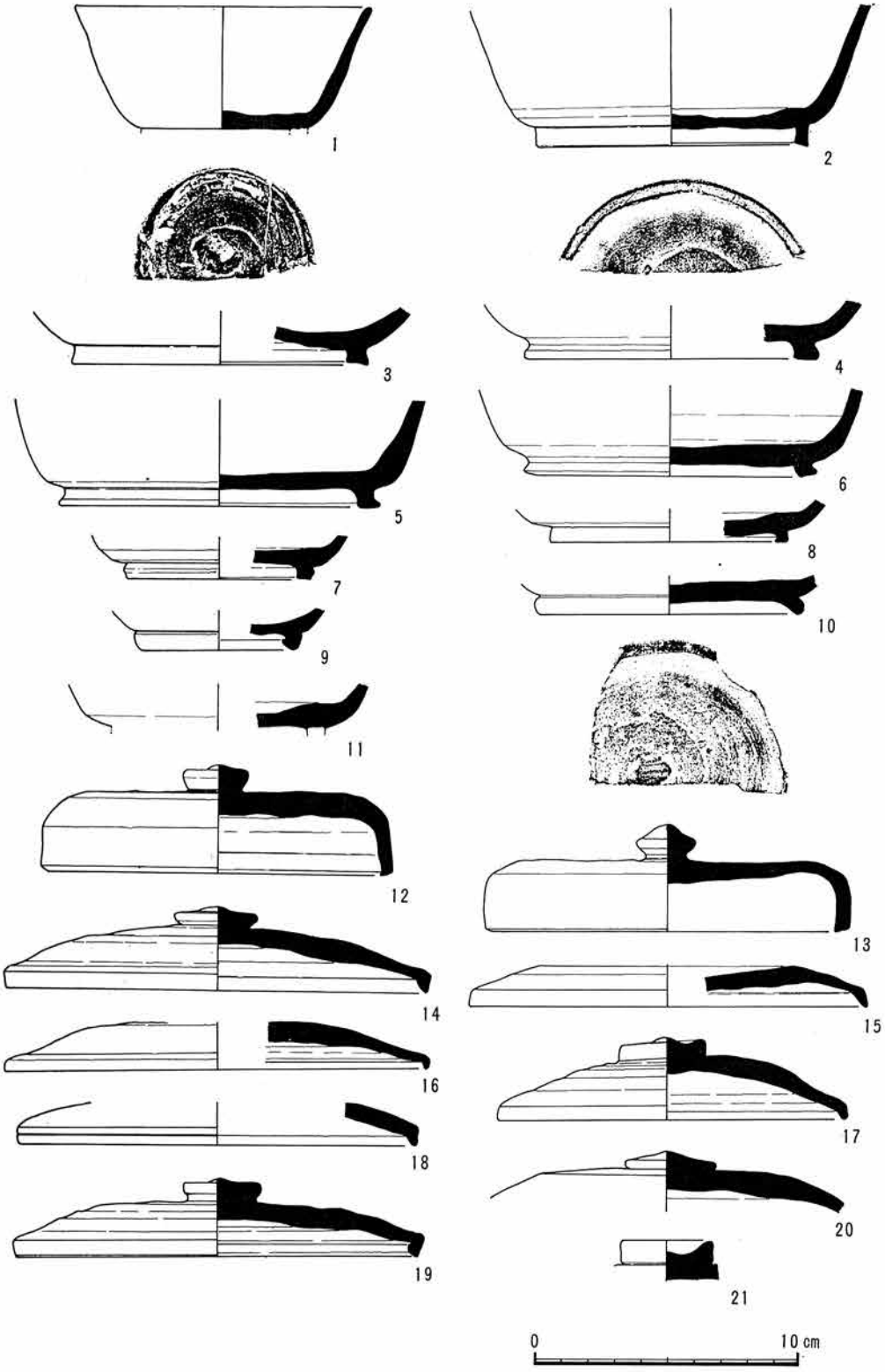
第５類（第８図10）　10は底径10cmで底部が厚く，高台が外方に開いて接着されている。胎土は水漉し粘土に少量の砂を混入し，焼成が良く硬質で灰色を呈する。

蓋形土器（第８図12～21，図版第10図１～８）

蓋は図示できるものが10点あり，全体器形のとらえられるものが５点ある。

第１類（第８図12・13）　短頸壺の蓋で，12は口径13.3cm，高さ4.1cm，摘径2.4cmを計る。天井部が水平で厚く，口辺部が垂直に近く下り，わずかに外方に開く。口唇部は外削ぎ状に削られ先端部が内側に突きだしている。摘は扁平な宝珠形を呈し整形後接着されている。天井部は左回転の篦削り整形が行われ，側面，内面はナデ整形されている。胎土は水漉し粘土に少量の荒砂を混入し，焼成は良く硬質で灰黒褐色を呈する。13は口径13.7cm，高さ４cmを計る。天井部は水平で曲り部が薄く，口辺部が丸味をもって垂直に下り，口唇部が外削ぎ状を呈する。曲り部分に１条の凹線を有し，摘は高く突き出す宝珠形を呈する。天井部は左回転の篦削り整形が行われ，側面，内面はナデ整形され，摘は整形後接着されている。摘基部には接着のためか灰釉が塗布されている。胎土は水漉し粘土に荒砂を少量混入し，焼成は良く硬質で灰黒褐色を呈する。

第２類（第８図14・15）　口辺部が断面三角形の嘴状を呈する一群で，14は口径16cm，高さ3.1cm，摘径３cmを計り，天井部が厚く，直線的な傾斜をもって口辺部に至る。天井部はナデ整形され，中心部から半分はナデ整形後に右回転の篦削り整形をしている。摘は扁平な宝珠形を呈する。胎土は水漉し粘土に少量の砂を混入し，焼成は良く青灰色を呈する。15は口径15cm



第 8 図　須　恵　器（埦形土器・蓋形土器）

で天井部が下り，肩部を作って口辺部に至る。天井部から肩部下にかけて右回転の篦削り整形後，口辺部から肩部にかけてナデ整形をしている。胎土は水漉し粘土に少量の砂を混入し，焼成が良く青灰色を呈する。

第３類（第８図16～18）　口辺部の断面が丸い嘴状を呈する一群で，16は口径16*cm*を計る。天井部は左回転の篦削り整形によって緩やかな肩部を作り口辺部に至る。口辺部は折り曲げ状を呈する。胎土は水漉し粘土に少量の砂を混入し，焼成が良く青灰色を呈する。17は口径13*cm*，高さ３*cm*，摘径3.2*cm*で丸い山状を呈し，天井部は左回転の篦整形をしている。摘は上面がくぼみ，その中心が突出する。胎土は水漉し粘土に砂を多く混入し，焼成が良く灰色を呈する。18は口径15*cm*で口唇部に１条の沈線を有する。胎土は水漉し粘土に砂を少量混入し，焼成は良く暗灰色を呈する。

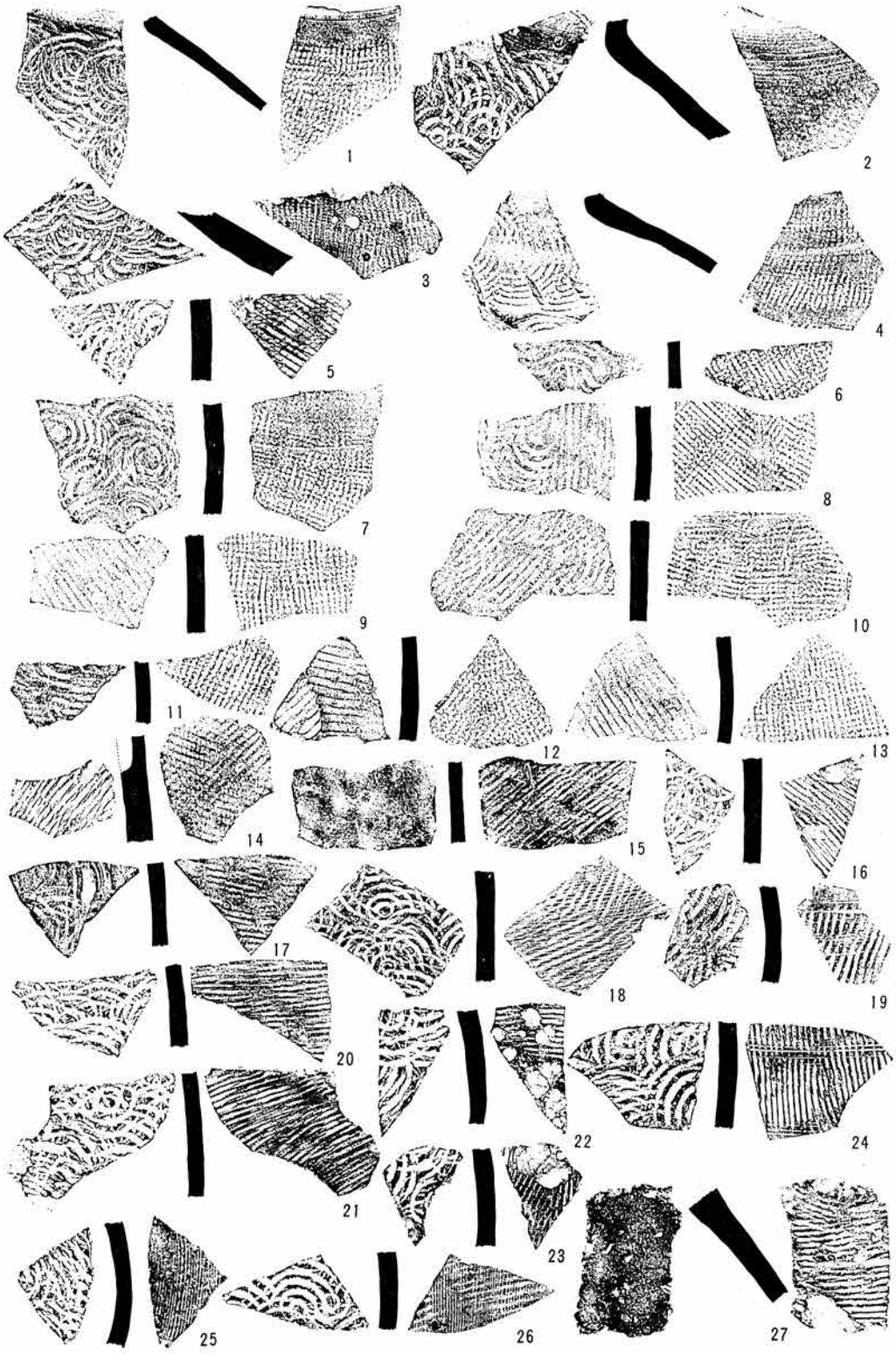
第４類（第８図19）　19は口径15*cm*，高さ2.9*cm*，摘径3.2*cm*で天井部が緩やかに下向して口辺部に至る。口辺部は内傾し巻き込み状を呈する。器全体が厚手で，巻き痕が明瞭に残り，摘は扁平な宝珠形を呈する。胎土は水漉し粘土をそのまま使用し，焼成は良く硬質で暗灰色を呈する。

20は天井部が水平で右回転の篦削りによって天井部が作られている。摘は扁平な宝珠形を呈し径3.5*cm*を計る。摘・天井部の形態から第２類に属すると考えられる。胎土は水漉し粘土に少量の砂を混入し，焼成は良く硬質で淡灰褐色を呈する。21は径3.5*cm*の摘で，上面が深くくぼみ中心がわずかに突き出している。胎土は水漉し粘土に細い砂を混入し，焼成は良く硬質で青灰色を呈する。

甕形土器（第５図24・第９図１～24，第10図１，図版第11図１～23）

甕形土器は破片になっているものが多く，図示できたのは２点にすぎない。

第５図24は口径49*cm*を計る大形甕で，口辺部中位に段を有し外反する。口縁の断面は角形を呈し口唇部が直立する。口唇部下に１条の沈線，口縁の横と下に１条の凹線がある。胎土は水漉し粘土に大粒の砂を混入し，焼成が良く硬質で灰黒色を呈する。第10図１は頸部が「く」の字状に屈曲して肩が張り，外傾して立つ。内面には円形叩目文が施されている。胎土は水漉し粘土に砂を混入し，焼成は良く硬質で灰黒色を呈する。第９図１～24は胴部破片で，１～７は外面に格子目状叩目文が施され，内面に同心円叩目文が施されている。４の同心円叩目文には中心から外周へ１条の凸線がある。８～11は外面に格子目状叩目文を施し，内面に同心円叩目文と平行叩目文を複合させ，平行叩目文後に同心円叩目文を施している。12～14は外面に格子目状叩目文，内面に平行叩目文を施している。15は外面に格子目状叩目文を施したあとナデ調整され，内面は圧痕となっている。16～24は外面に平行叩目文，内面に同心円叩目文が施されており，18は櫛整形後平行叩目文し，19・24は叩整形後櫛による部分整形がみられる。



第 9 図　須恵器（甕形土器・横瓶），中世陶器

壺形土器（第10図２～６，図版第９図21～26）

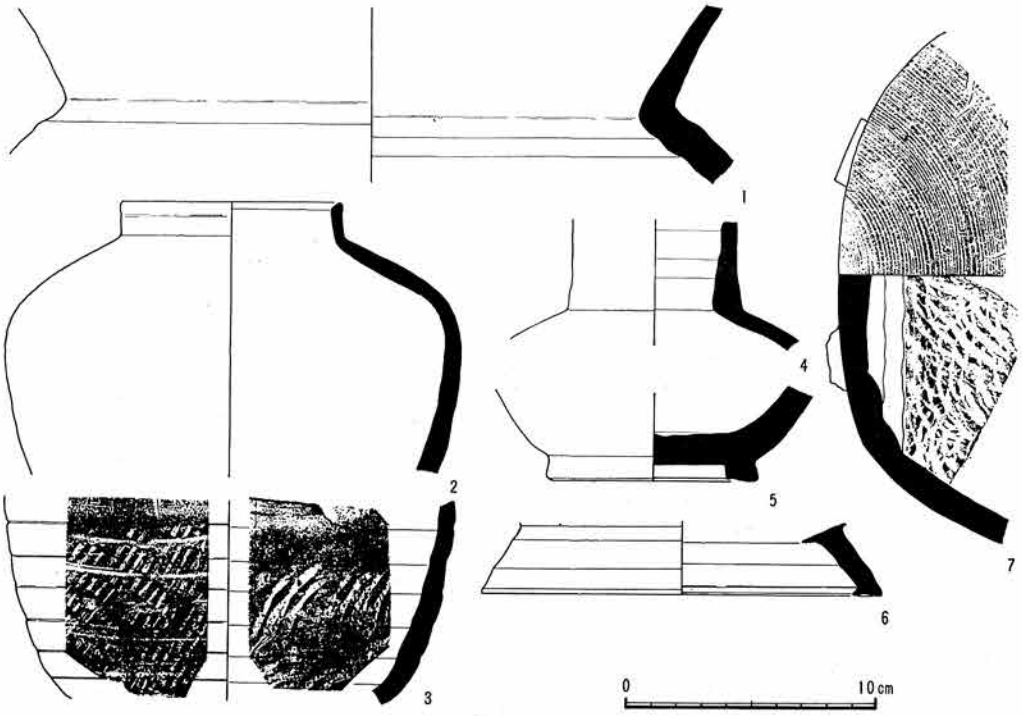
壺形土器は５点が検出されたが，全体の器形がとらえられるものはない。

２は口径8.7*cm*を計る短頸壺で，口辺部が短かく直立し，口唇部が内削ぎ状を呈する。頸部は「く」の字状に屈曲し，肩部が下り緩やかに曲る。胎土は水漉し粘土に砂を混入し，焼成が良く灰黒色を呈する。３は胴部で輪積痕が明瞭に残り，内面，外面に平行叩目文が施されている。胎土は水漉し粘土に砂を混入し，焼成が良く硬質で灰黒色を呈する。４は長頸壺の頸部で輪積痕を残し，頸部から肩部が「く」の字状に曲る。胎土は水漉し粘土をそのまま使い，焼成が良く硬質で黒灰色を呈する。５は底部で底径8.5*cm*を計る。底部から丸味をもって立ち上り，厚手である。高台は付高台で垂直に接着されている。胎土は水漉し粘土がそのまま使用されているが細かな礫が混っている。焼成は良く硬質で灰色を呈する。６の器形は不明であるがここでは壺の高台として扱った。底径14*cm*で「ハ」の字形に外方に開き輪積の段がみられる。胎土は水漉し粘土に砂を混入し，焼成が良く硬質で灰黒色を呈する。

横　　瓶（第９図25・26・第10図７，図版第10図９，図版第11図24・25）

横瓶は３点検出されたが全体の器形がとらえられるものはない。

第９図７は胴部で，左右に円板状の粘土板の蓋を張り合せたもので，外面はロクロによるか



第 10 図　須 恵 器（甕形土器・壺形土器・横瓶）

き目整形が行われ，内面は同心円叩目文が施されている。外面には自然の灰釉がかかり，焼成時の支えの土器片が付着している。胎土は粘土に荒砂を混入し，焼成が良く硬質で灰色を呈する。25・26は外面にロクロによるかき目痕が残り，内面は同心円叩目文となっている。

3. 中世・近世の陶器 （第9図27，図版第11図26・31～33）

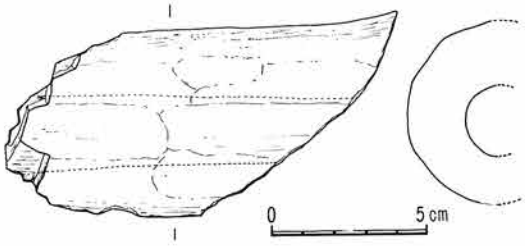
中世の陶器は1点で，27は外面に平行叩目文が施され，胎土は荒く砂を多く含んでいる。焼成は良く硬質で暗灰色を呈する。室町時代頃の珠洲系陶質土器であろう。

近世の陶器は日常容器片が検出されており，甕，摺鉢，椀等である。図版第11図31・32は摺鉢底部で，31は糸切の平底を有し，32は厚い大きな高台がついている。33は甕の底部で高台が付いている。

4. その他の遺物

吹子口（第11図，図版第8図24）

吹子口は1点検出され，円筒形を呈し先端部が焼けている。全長はわからないが，現存中央部径は6*cm*，風孔径2.5*cm*である。胎土は水漉しされた粘土を使用し，焼成が悪く軟質で褐色を呈する。

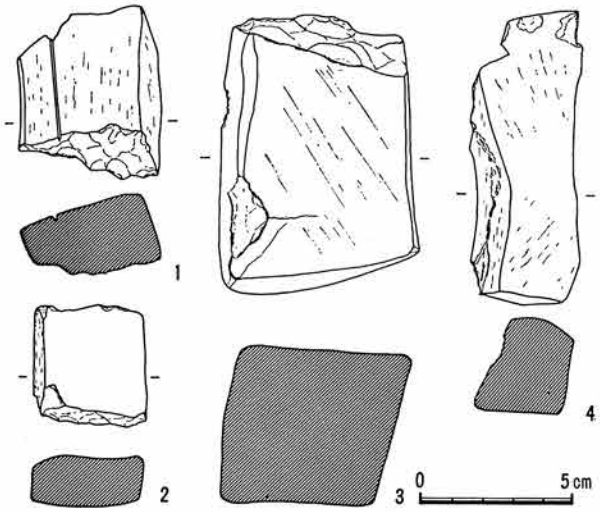


第11図 吹 子 口

砥石（第12図1～4，図版第11図27～30）

1は角柱形をしていたものと考えられ，3面の砥面があり1条の切断時についたと考えられる溝がある。2は板状を呈し4面に砥面を持っている。3・4は角柱形で，4面の砥面を持っている。石質は硬い凝灰岩質のものと思われる。農業用鎌砥石と考えられるが時代等についてはわからない。

（本間信昭）



第12図 砥 石

Ⅳ 総　　括

1. 土器について

(1) 土師器について

本遺跡で検出された土師器は甕，塝，壺，高坏である。発掘は層位的に行われたが大規模な基盤整備が行われた水田のため，出土遺物を層位的に分類することができず，量の多い甕形土器について器形による分類を行った。ここではこの分類をもとに他遺跡との比較・検討を行い，本遺跡出土の土師器について考えてみる。

新潟県において9世紀前後の遺跡として調査されたものには長所遺跡，半ノ木遺跡，内町遺跡，浜田遺跡，長表遺跡等がある。

長所遺跡(註1)出土の甕形土器は細片となっているが，本遺跡甕第5類に属するもので，糸切底の坏，内黒の椀が伴出し，9世紀後半～11世紀とされている。半ノ木遺跡(註2)は住居址の検出と遺物の量が多かったことなどから良好な遺跡であったと同時に，住居址における土師器のセット関係が明らかになった。半ノ木遺跡の土師器のセットは甕，塝，椀の三器種で，甕形土器は本遺跡第1類，第5類に属するもので，第5類が中心となっている。この遺跡からは愛知県猿投窯の緑釉鉢が伴出しており，これらを考え合せて8～10世紀の年代を与えている。内町遺跡(註3)の甕形土器は6点あり，本遺跡第1類，第5類に属し，8～10世紀としている。浜田遺跡(註4)においては須恵器が主体を占めており，土師器は坏，三足土器で甕形土器がわからない。しかし分類上古式土師器として扱った一群に長胴形を呈する甕形土器があり，これらの中に本遺跡，第2類・第4類に類似するものがみられる。また浜田遺跡の長胴甕は長野県安宅遺跡(註5)の甕形土器に類似性がみられ，安宅遺跡が8世紀としており，浜田遺跡の長胴甕もこの時期としてとらえるのが妥当かも知れない。長表遺跡(註6)における土師器は坏のみで，直接の比較はできないが須恵器の伴出している。土師器については9世紀後半，伴出の須恵器が8世紀初頭～9世紀とされてい甕，塝がる。県内の遺跡では第1類，第2類，第4類，第5類に属するものがとらえられ，特に第5類が中心となっている。

県外の遺跡と比較すると，第1類は石川県三浦遺跡中層甕A類(註7)，保賀B遺跡B類(註8)，富山県中山南遺跡(註9)に近似するものがあり，8～9世紀の年代があてられている。第2類は富山県中山南遺跡に近似するものがあり8世紀中頃～9世紀とされている。第3類は石川県矢田新遺跡(註10)，千崎遺跡(註11)14号住居址出土の甕に類似しており，前者は8世紀，後者は平安時代中期とされている。第4類は石川県勅使遺跡(註12)7号溝，長野県安宅遺跡，などに類似するものがみられ，第5図11の肩に陵を有し胴が張る甕は東北地方に多くみられ，岩手県堀野遺跡(註13)，仙波提遺跡(註14)等で出土している甕が本遺跡のものに類似している。また第5図12の篦による縦方向の削り整形のものは鬼

高期以降の甕形土器に用いられている技法で，関東地方に多く見られる。これらは8世紀～平安時代中期頃とされている。第5類は北陸地方，西日本一帯に広く分布しており，特に北陸地方に典型的なものがみられ，石川県三浦遺跡中層，矢田新遺跡，富山県中山南遺跡，小森谷遺跡[註15]等では主体を占めていが，全体器形のとらえられるものは少なく石川県金沢市専光寺町出土[註16]の長胴を呈し丸底の甕はその典型で胴部が，横ナデと叩によって整形されている。本遺跡においても叩目文のある底部附近の破片がみられる。これらは8世紀～9世紀とされている。第6類は石川県保賀B遺跡，千崎遺跡，富山県じょうべのま遺跡[註17]等に類似するものがあり，8世紀～9世紀とされている。

また胎土については水漉しされた粘土に砂を多く混入しており，焼成は悪い。製作の点では輪積または巻き上げ法をとっており，各遺跡出土の甕形土器と共通している。

このように本遺跡出土の甕形土器と他遺跡出土の甕形土器は類例と比較により8～10世紀の年代を与えることができよう。しかし8世紀中頃～9世紀前半と9世紀後半～10世紀における甕形土器の形態的相異は，富山県高瀬遺跡[註18]とじょうべのま遺跡，石川県三浦遺跡における中層と上層の甕形土器の形態的な相異としてとらえることができ，8世紀中頃～9世紀前半にかけては本遺跡第5類を中心とする甕形土器となり，9世紀後半～10世紀にかけての甕形土器は，石川県三浦遺跡上層，安養寺遺跡[註19]でみられる口辺部が「S」字状に屈曲する形態をとるものと考えられる。したがって本遺跡出土の甕形土器は8世紀中頃～9世紀前半と考えるのが現段階では妥当であろう。

（本間信昭）

註1　「長所遺跡の概要」燕郷土史考第2集　昭和45年
2　本間信昭「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）　昭和48年
3　本間信昭・家田順一郎・駒形敏朗「内町遺跡調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告第3』新潟県教育委員会）　昭和49年
4　本間嘉晴・関雅之・本間信昭『浜田遺跡』真野町教育委員会　昭和50年
5　佐藤甦信「安宅遺跡出土の土器」（『土師式土器集成4』）　昭和49年
吉岡康暢氏の御教示による。
6　中村孝三郎・金子拓男・中島栄一・池田享『長表遺跡』六日町教育委員会　昭和50年
7　高堀勝喜・金山顕光・吉岡康暢・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会　昭和42年
8　吉岡康暢「保賀B遺跡出土の土器」（『土師式土器集成4』）　昭和49年
9　『小杉町中山南遺跡』富山県教育委員会　昭和46年
10　「加賀天田新遺跡の第1次調査」（『研究紀要第6集』小松市立博物館）　昭和46年
11　四柳嘉章・高橋裕『加賀市千崎・大島遺跡』石川県教育委員会　昭和47年
12　田島明人『加賀市勅使遺跡群発掘調査報告書』石川県教育委員会　昭和50年
13　草間俊一『堀野遺跡』福岡町教育委員会　昭和40年
14　草間俊一「仙波提遺跡出土の土器」（『土師式土器集成4』）　昭和49年
15　『小矢部市小森谷遺跡』富山県教育委員会　昭和48年
16　註7に同じ

17　「じょうべのま遺跡」(『埋蔵文化財調査報告Ⅲ』富山県教育委員会)　昭和49年
18　註17に同じ
19　湯尻修平・塚野秀章『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』石川県教育委員会　昭和50年

(2)　須恵器について

本遺において検出された須恵器は坏・椀・蓋・甕・壺・横瓶の6器種が検出されたが，いずれも少量で，全体器形のとらえられるものが坏と蓋に限られているため，器種を量的に検討することができない。また前項でのべたように層位による分類ができないので，本項では器形による他遺跡との比較をするに止めたい。

坏はすべて篦起し技法による底部の切り離しが行われ，その後さらに回転による篦の削りによる再整形がなされている。県内でこの再整形の技法は浜田遺跡(註1)の椀で顕著にみられ細かく指摘されている。また同様の技法は長表遺跡(註2)においてもみられるが，本遺跡の坏では最後に行われた横ナデ調整によって，浜田遺跡，長表遺跡などでみられるほど顕著ではない。器形においては浜田遺跡，半ノ木遺跡(註3)，長表遺遺跡1A・1D，石川県末町窯址群(註4)などで検出されているものに類似しており，これらは8～9世紀に比定されている。

椀は全体器形のわかるものがなく，高台の形態による比較しかできない。底部は篦起しによる切り離しで，高台が接着されている。接着部は回転による横ナデが行われ，底部外周部分の篦起し痕が消えている。器形からは第1類の坏部に第2類，第3類の高台の付くものが浜田遺跡，半ノ木遺跡でみられ，高台部分の類似するものが石川県三浦遺跡中層(註5)にある。また第4類とした高台は浜田遺跡，半ノ木遺跡，石川県末町窯址群などでみられ，これら第1類～第4類は8～9世紀と考えられている。第5類とした高台は石川県三浦遺跡上層(註6)の灰釉，白磁陶器，安養寺遺跡(註7)，柴木遺跡(註8)の椀，皿形土器に類似するものがみられ，これらと同一視できるとすれば10世紀前後のものとしてとらえられる。

蓋は容器との組み合せにおいて短頸壺と坏又は椀の蓋と分けることができる。第1類は短頸壺の蓋で，県内においてあまり報告例がなく，狼沢窯址(註9)，間野窯址(註10)において報告されているものは形態を異にしている。本遺跡のものと形態の類似するものは石川県三浦遺跡中層，安養寺遺跡B地点にみられる。またこの形態をもつ蓋は正倉院の須恵器壺(註11)，奈良時代から平安時代にかけての墳墓から発見されている短頸壺の骨蔵器の蓋に類例を多く見ることができ，8世紀から9世紀にかけて隆盛をきわめる短頸壺と共存するものと考えられる。第2類～第4類は坏又は椀の蓋で，第2類，第3類は半ノ木遺跡，浜田遺跡，間野窯址，石川県三浦遺跡中層など8～9世紀の遺跡に類例が多くみられる。また第4類の内側に巻き込む口唇部をもつものは，半ノ木遺跡，石川県三浦遺跡上層，西島遺跡(註12)，富山県中山南遺跡(註13)，福山遺跡(註14)などに類例があり，9～10世紀頃とされている。

甕は細片になっており，第5図24にみられる口辺辺部に段を有するものは石川県安養寺遺跡A地点の甕にみられ，口辺部に櫛描き波状文が施されている。

壺形土器は短頸壺と長頸壺が検出されている。短頸壺は半ノ木遺跡，間野窯址，七本松窯址(註15)などで検出されているが形態が異なる。形態の類似するものは石川県西島遺跡，富山県中山南遺跡などにみられ，9～10世紀頃とされている。

横瓶は県内でも各遺跡から検出されているが，年代を決定するまでには至っておらず，8～10世紀頃にかけて多量に焼かれたものと考えられる。

北陸地方における須恵器の編年が確立していない現段階において本遺跡出土の須恵器の年代の決定には問題があるが，他遺跡との比較において8世紀～10世紀の巾広い年代が考えられる。しかし全体器形のとらえられた坏，蓋において8世紀中頃～9世紀前半に比定できるものと考えらる。短頸壺と第4類の蓋は他遺跡との比較において9世紀後半～10世紀の年代が考えられるが，短頸壺の隆盛が8～9世紀と考えられる事からして，この時期としてとらえるのが妥当であるかも知れない。これら短頸壺，口唇部が内側に巻き込む蓋については類例を待って今後の検討としたい。

（本間信昭）

註1　本間嘉晴・関雅之・本間信昭『浜田遺跡』真野町教育委員会　昭和50年
2　中村孝三郎・金子拓男・中島栄一・池田享『長表遺跡』六日町教育委員会　昭和50年
3　本間信昭・関雅之・玉木哲「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）　昭和48年
4　小島芳孝「金沢市末町附近の窯址群とその歴史的性格」石川考古学研究会会誌18号　昭和50年
5　高堀勝喜・金山顕光・吉岡康暢・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会　昭和42年
6　註5に同じ
7　湯尻修平・塚野秀章『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』石川県教育委員会　昭和50年
8　中島俊一・梶幸夫『安養寺遺跡群発掘調査概報』石川県教育委員会　昭和50年
9　中川成夫・川上貞夫・土井義雄『狼沢窯址群の調査』笹神村教育委員会　昭和48年
10　中川成夫・小出義治・甘糟健「古志郡山本村間野窯跡発掘調査報告書」越佐研究第13集　昭和33年
11　『正倉院の陶器』日本経済新聞社　昭和46年
12　平田天秋・橋本澄夫『加賀市西島遺跡』石川県教育委員会　昭和48年
13　『小杉町中山南遺跡』富山県教育委員会　昭和46年
14　『埋蔵文化財調査報告Ⅲ』富山県教育委員会　昭和49年
15　中川成夫・倉田芳郎「新津田家七本松須恵器窯址発掘調査報告」越佐研究第11集　昭和31年

2. ま　と　め

新潟平野は早くから開拓され，今日までの長い間にくり返し基盤整備などの地形の形状変更が行われてきた。これらの形状変更は平野部に存在していた多くの遺跡を破壊，湮滅させてきた反面，遺跡発見の起因にもなっていた。新潟平野で発掘調査が行われるようになってきたのは近年のことで，その結果，栄村半ノ木遺跡，長畑遺跡などのように保存状態の良い遺跡の存在が明らかになり，低湿地における遺跡が注目されてきた。

茶院遺跡は戦後発見され，その後行われた大規模な圃場整備によって遺跡の大部分が破壊された。そのため本遺跡からは遺構が検出されず，遺跡の中心部及び性格については究明できなかったが，遺物の出土量の多いことや，土層観察において微高地の存在が考えられることなどから，本発掘地もしくはその周辺のいずれかに古代集落があったものと推察される。

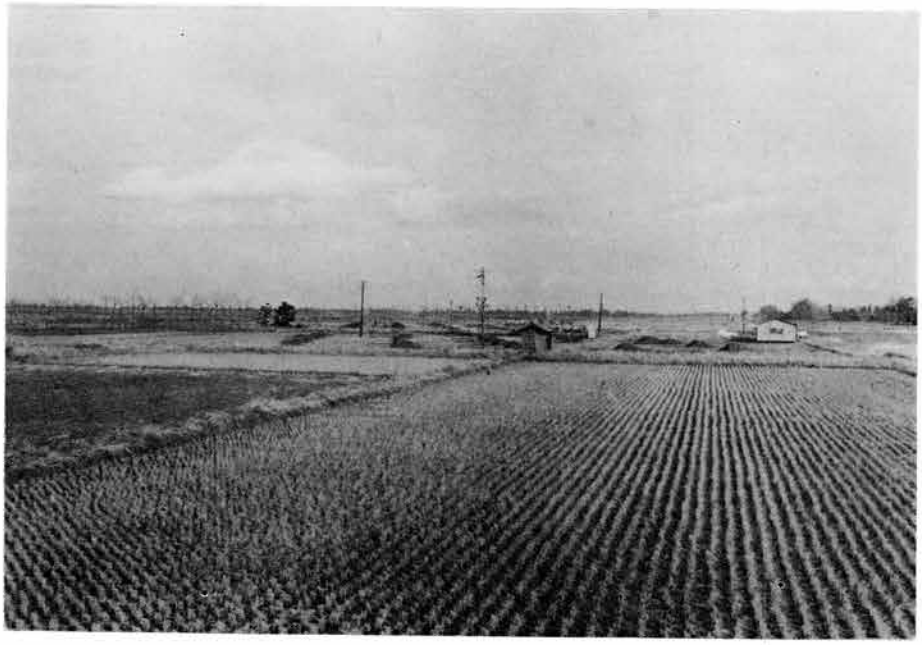
また本遺跡で検出した土師器，須恵器の中心をなすものは他遺跡との比較において8世紀中頃～9世紀前半に位置するものと考えられるが，一部の須恵器については9世紀後半～10世紀頃とも考えられるのでなお検討の必要があろう。

茶院遺跡出土の土師器甕は製作技法において，旧態の土師器製作技法をとっているものと，須恵器の製作技法を取り入れたと考えられるものがある。第5類とした長胴甕は須恵器技法によるものと考えられ，狼沢窯址[註1]，石川県末町1号窯址[註2]などで検出されている須恵器甕に類似している。これらは石川県専光寺町出土[註3]の土師器甕と同様のものと考えられ，胴部を横ナデと叩きによって整形している。これは旧来の土師器甕においてみられない技法で須恵器甕の製作において用いられている技法である。8～9世紀においては土師器甕と須恵器甕の両方が作られており，土師器の器種のほとんどが須恵器に変ってきている。土師器として残っているものは甕，堝，椀の三器種に限られてきているが，甕，堝においては須恵器と同様の器形，技法をとるものが焼かれ量的にも多なってきている。これらのことから北陸地方における土師器甕，堝の製作において須恵器の製作技法が取り入れられてくるのは8世紀後半頃からと推定され，土師器の終末期的様相を呈するものと考えられる。また藤塚貝塚[註4]上層においては須恵器の高台付椀と同様のものが土師器の焼成になっており，これらが量的にも多いことから，土師器の終末期のあり方を示す資料として，本遺跡のものとあわせて今後の検討としたい。

（本間信昭）

註1　中川成夫・川上貞夫・土井義雄『狼沢窯址群の調査』笹神村教育委員会　昭和48年
2　小島芳孝「金沢市末町附近の窯址群とその歴史的性格」石川考古学研究会会誌18号　昭和50年
3　高堀勝喜・金山頤光・吉岡康暢・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会　昭和42年
4　中川成夫・岡本勇・小片保他『佐渡藤塚貝塚』真野町教育委員会　昭和44年

茶院遺跡附近の航空写真　　(1/10,000)

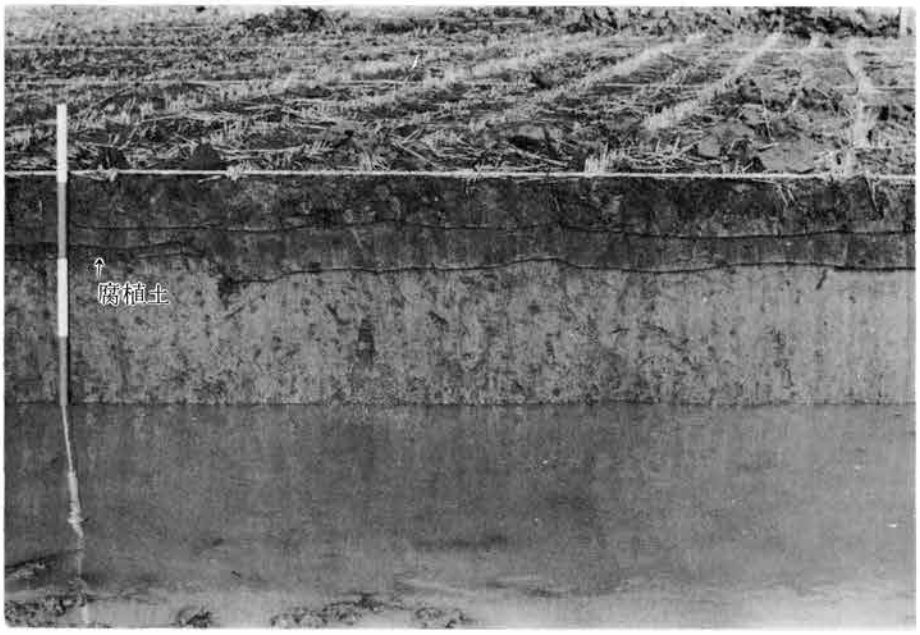


遺 跡 の 近 景（南側より）

遺 跡 の 近 景（西側より）

発掘グリッド

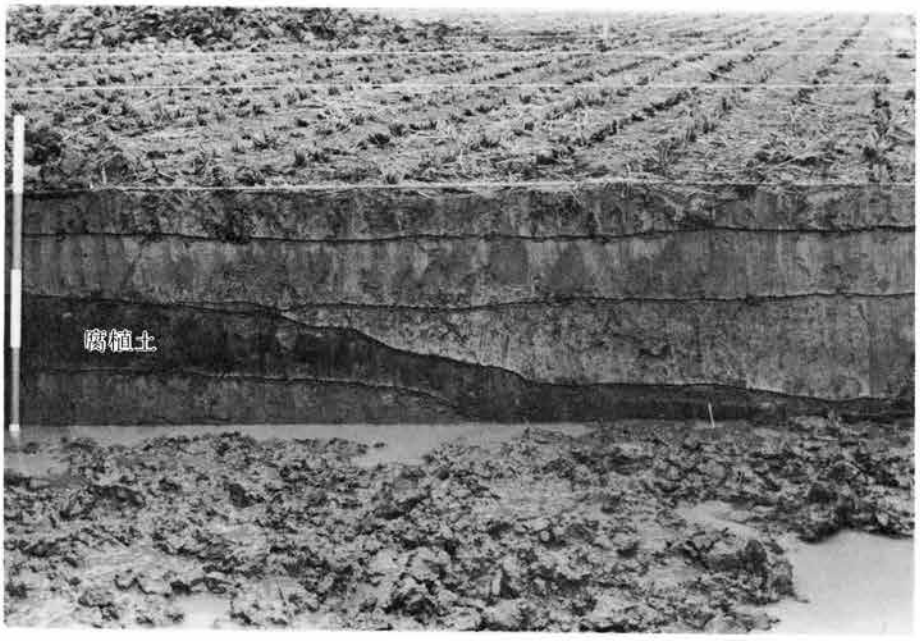
打越館推定地の土塁



14Cグリッド北壁断面

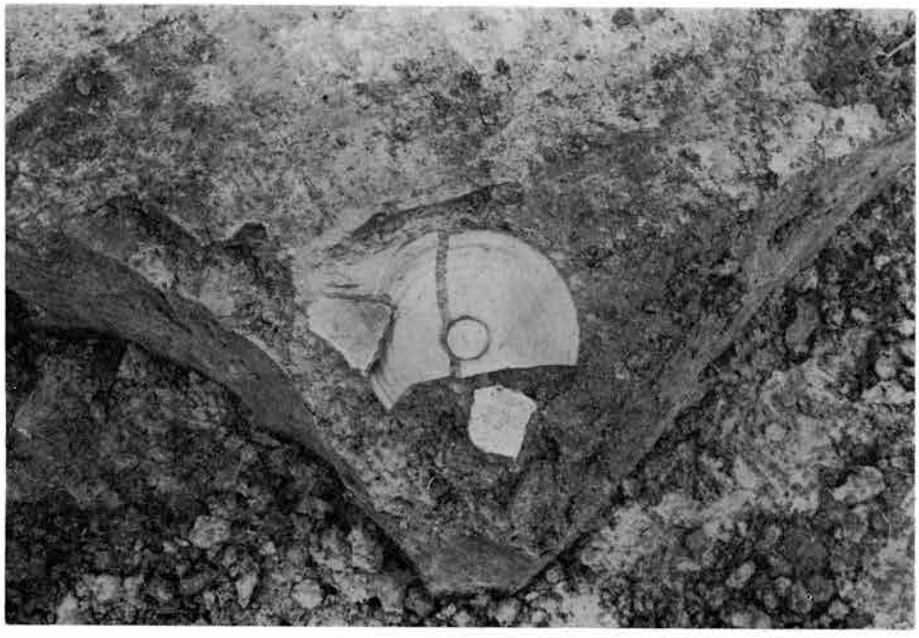
22Cグリッド東壁断面

6Sグリッド東壁断面



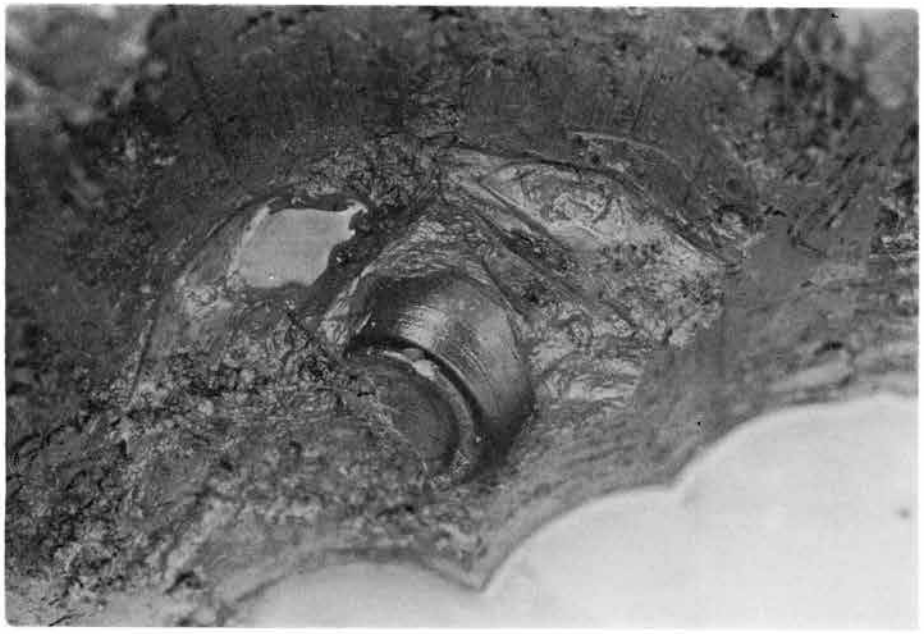
2Cグリッド西壁断面

発　掘　風　景

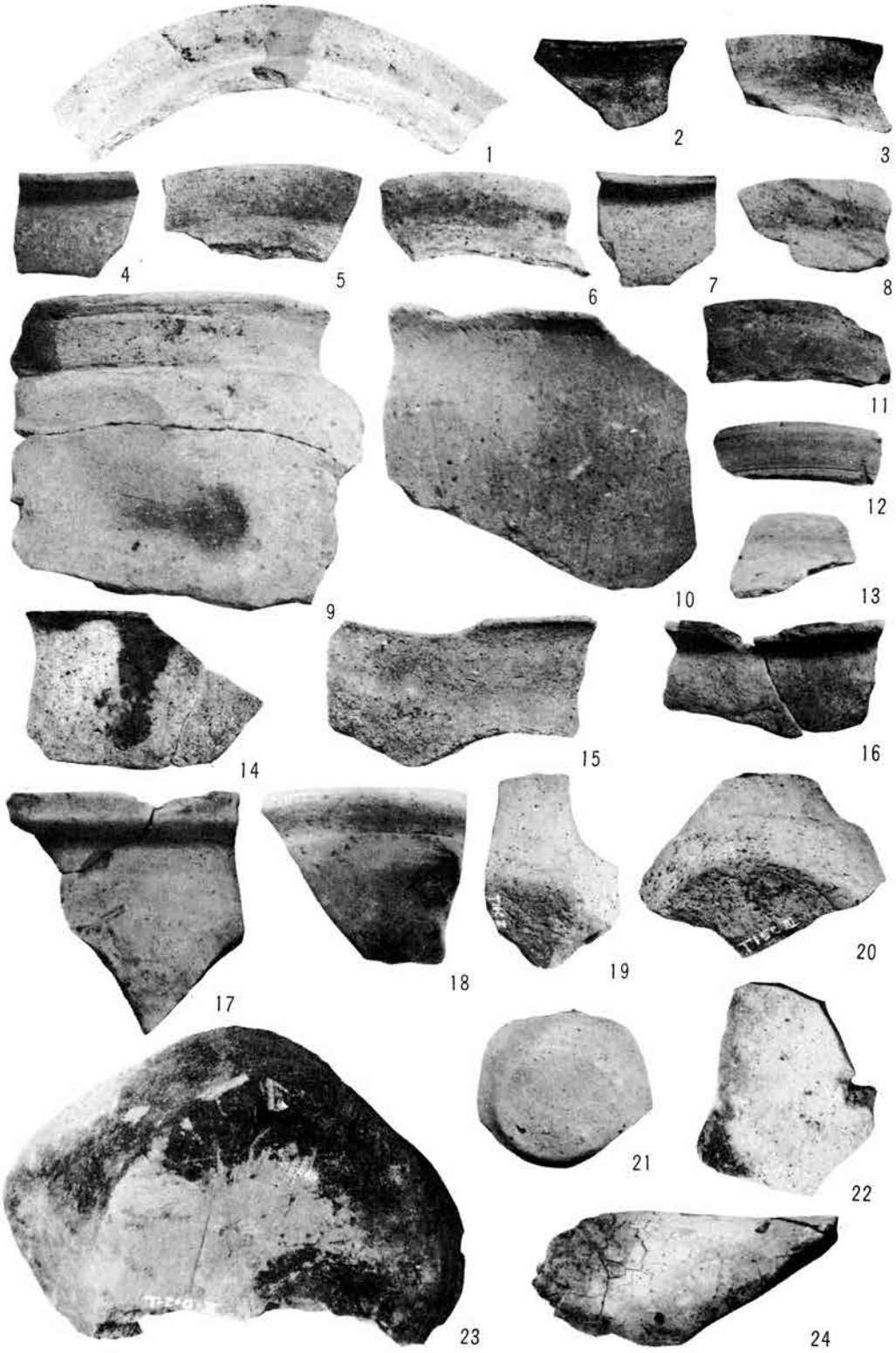


須恵器（蓋）出土状態

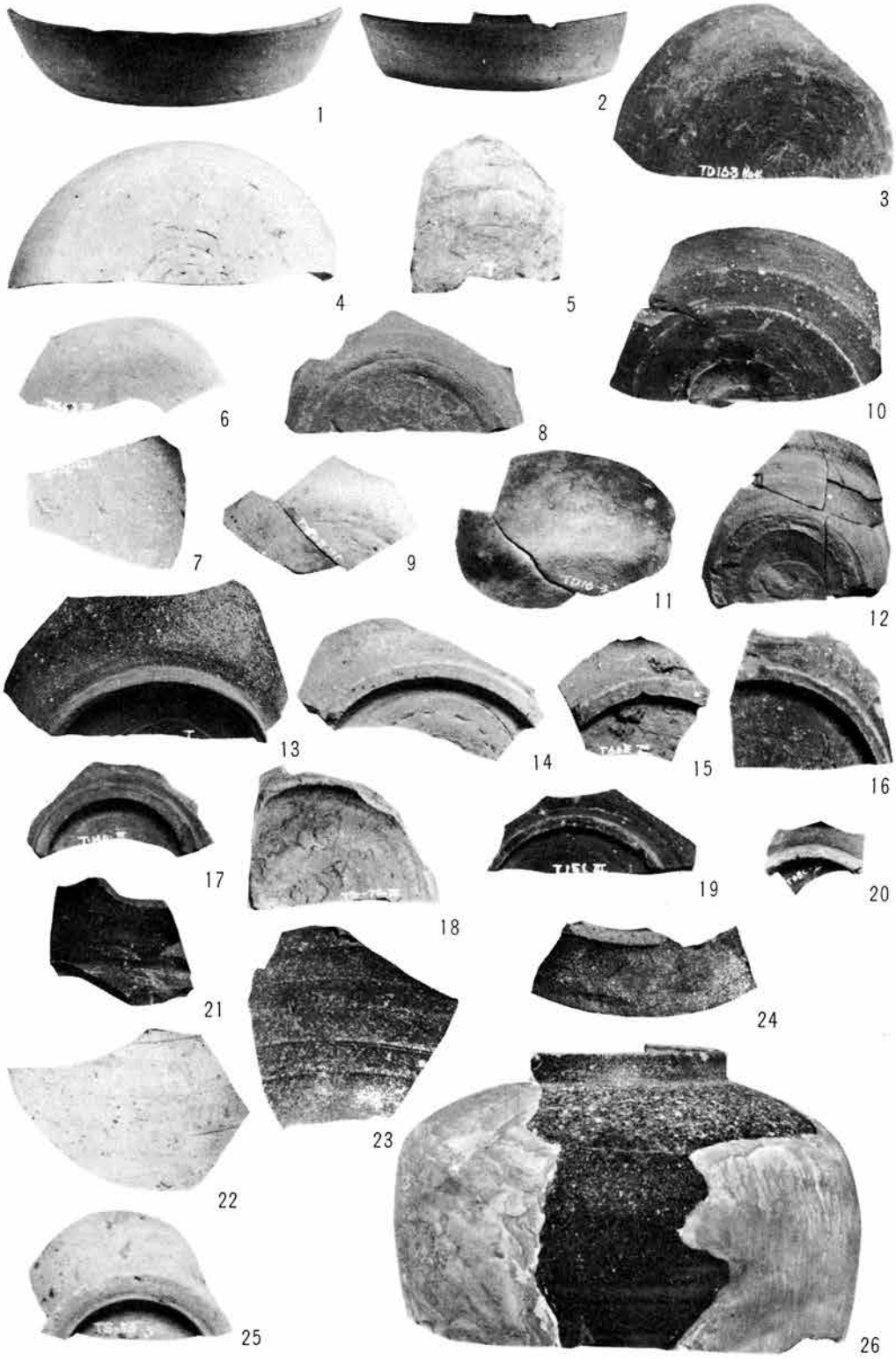
須恵器（横瓶）出土状態



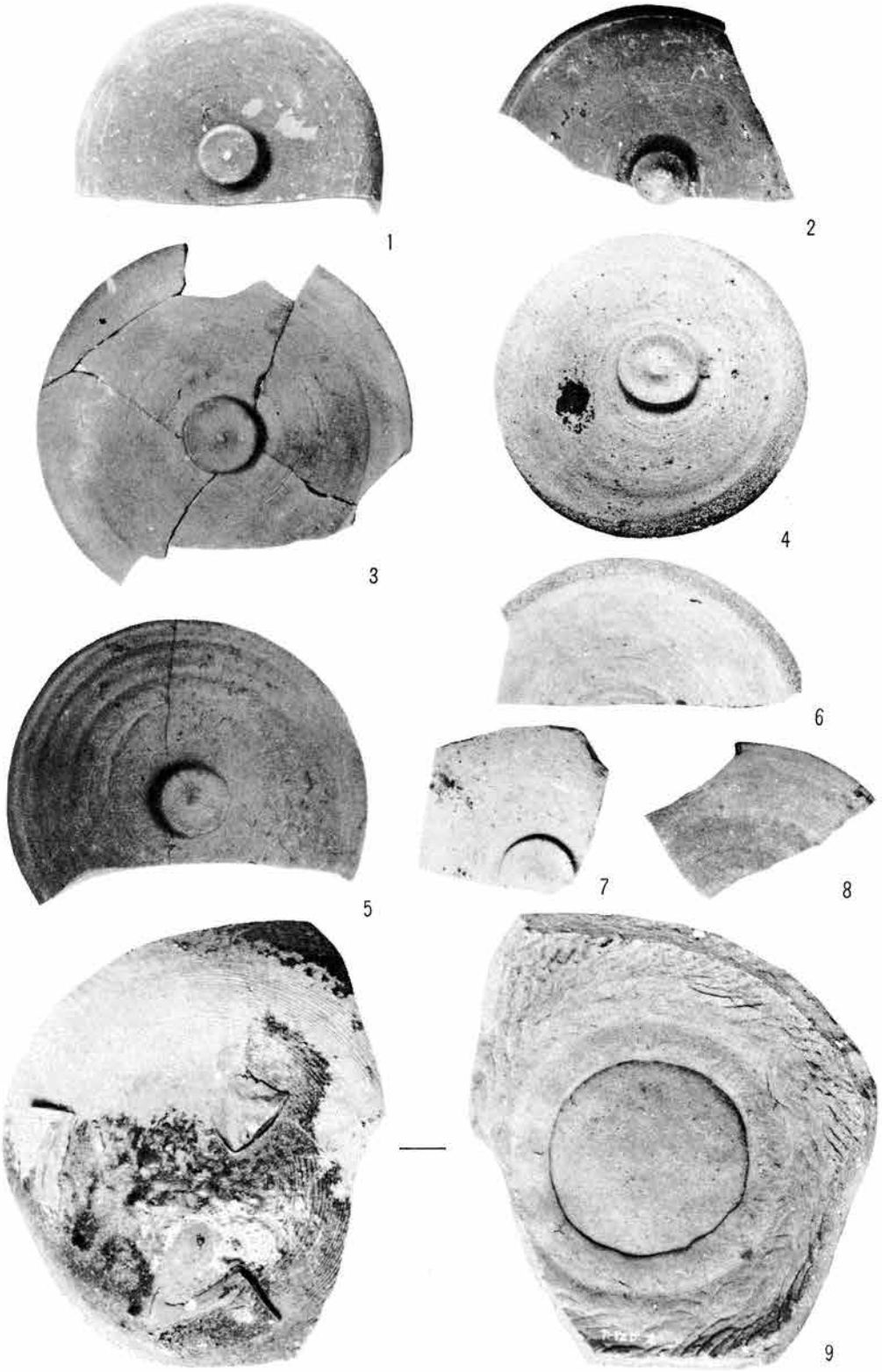
近世陶器（甕）出土状態



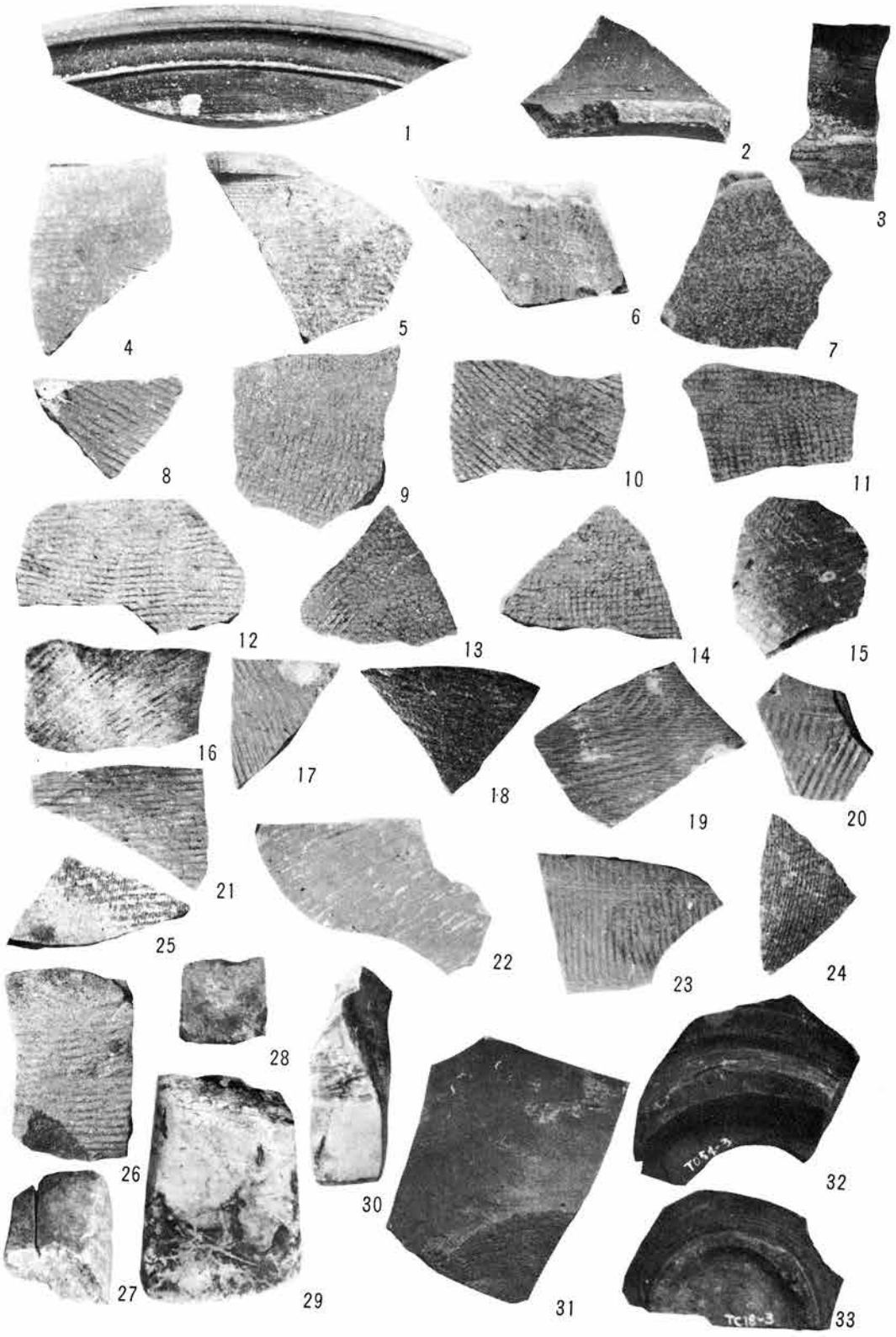
土師器（甕形土器・堝形土器）、吹子口



須恵器（坏形土器・椀形土器・壺形土器）



須恵器（蓋形土器・横瓶）



須恵器（甕形土器・横瓶）、中世陶器、砥石、近世陶器

新潟県埋蔵文化財調査報告書第5

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

茶院遺跡

——1976——

昭和51年3月10日 印刷
昭和51年3月20日 発行

発行　新潟県教育委員会
印刷　㊥長谷川印刷
新潟市学校町通1番町6
TEL (28) 3309番

新潟県埋蔵文化財調査報告第５　正誤表

ページ	行	誤	正
8	下１	もの推定できよう。	ものと推定できよう。
9	下８	肩部に陵を有し,	肩部に稜を有し,
18	下１	第９図７は	第10図７は
20	下９	い甕，堝がる。	いる甕，堝がある。
20	下２	肩に陵を	肩に稜を
22	5	本遺において	本遺跡において